

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

8



第七十七卷 第八号 日本幼稚園協会

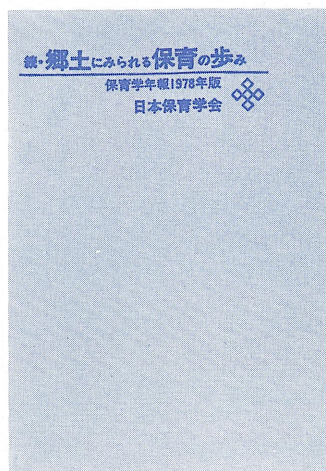
好評中
発売

保育学年報 1978年版

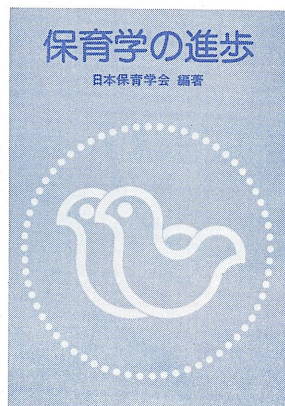
続・郷土にみられる保育の歩み

日本保育学会編著

A5判 280頁 定価2,900円



1976年版の特集「郷土にみられる保育の歩み」の続編です。今回は、岩手・秋田・山形・栃木・愛知・奈良・愛媛の7県に関する研究論文が収められています。前回とあわせて幼児保育史の研究に役立ちます。第2部「保育の歩み」は保育界の1年間の動きをとりまとめてあります。広く保育研究のために役立つ資料が満載されています。



日本保育学会創設30周年記念出版

保育学の進歩

日本保育学会編著

A5判 544頁 定価2,700円

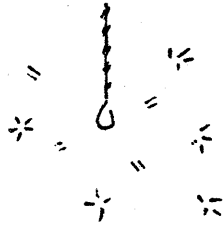
くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課 (03) 292-7781 (代) にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十七卷 第八号





Deke.

幼児の教育 目次

——第七十七卷 八月号——

表紙 梶山俊夫
カット 中島英子

© 1978
日本幼稚園協会

小さな火花のピエロ

——「線香花火」に寄せて——……………河辺 果……………(4)

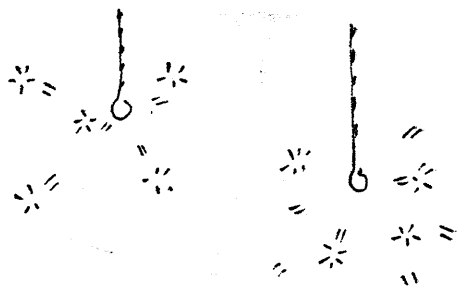
ある幼児の死生観

——孫との対話から——……………辻 正三……………(6)

☆講演

ピフォア・スクーリング

——子どもの心とからだを汚染から救わなければ——……………周郷 博……………(9)
幼児たちから学ぶかすかすのこと④……………丸山 ふみ……………(14)



◇児童文化探訪

線香花火をたずねて……………皆川美恵子…(16)

線香花火の思い出……………高崎 斐子…(26)

線香花火……………豊田 麻江…(28)

信濃の花火……………清水いく子…(30)

線香花火……………田中三保子…(36)

経験——その三……………村田 修子…(39)

永瀬義郎先生のこと……………赤間 峰子…(42)

人でつづる保育史

高崎能樹先生の生涯とその教育活動(その二)……………小林 公一…(44)

子どもの活動と保育空間(その三)……………堀井 仁子…(51)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(十八)……………津守 真…(57)

小さな火花のピエロ

——「線香花火」に寄せて——

河 辺 杲 あきら

「線香花火」ということばを聞いたとき、幼い頃のいろいろのイメージが甦って来た。

そこには夏の夜の風の匂いがあり、そこに住んでいた人たちのさんざめきがきこえて来たり、またそこには過ぎ去ったま昼の暑さやざわめきから解放されたやすらぎの雰囲気までが甦って来た。

私にとって「線香花火」は私の幼い頃を象徴する単なる玩具でもなく、郷愁という題名をもった風物詩のひとつの素材でもなく、私自身のからだの中に沈潜してしまっていて神秘的なひびきすらもつ美しい物語そのもののように思われる。

不思議に「線香花火」そのものだけが浮き彫りにならなくて、その周囲のひとつやものの中にとけこんで光と影のようにひとつの情景となっている。それはあたかもレンブラントやラ・トゥールの作品に見るような暗闇の中に生命を宿した小さな光が創り出す映像さながらのようでもある。それはまさ

に不可思議とも思える「生きた小さな火の饗宴の図」とでも言えよう。

十五センチばかりのか細いいぐさ闇のような乾いた草の茎のような感触が大へん印象的で、その先端に小さな黒い泥塊のようなものがついていて小人がもつ槍のようにも見えた。それが十本ほどたばねられていて細い紅色の紙で帯状にしばられていた。それは夜店や駄菓子屋から買って来た宝物でもあった。

その束から折れないようにそっと一本を抜きとるとたいていは父親の煙草盆の炭火にあてがって火をつけた。蚊やり線香の火を使ったこともある。

その一瞬、閃光と白煙が広がる。それは魔法そのもののようであった。ただ息をひそめる沈黙の世界でもあった。

その中から小さいけれどもすべてのものを溶解してしまうかのような灼熱の火の塊が生成される。それはきつとマグマのようであつたろう。

りする。「これは心の真に大切な中心を象徴しているのだ」とユングは考えた）

そして飛散するその様は広大な宇宙に飛んでいく翼のある

天馬にも見えよう。そこには精神の超越性とも呼ばれる自由や解放への欲求の象徴があるとも考えられよう。華麗ともいえるこの火の散華に心を奪われながら精神の全体性や超越性を獲得していったのかも知れない。

つかの間の安定した興奮に満足した頃、「火の散華」は「細火」とも名づけたような小さな小さな線状の火となつて次第に小さく地上に落ちて消えていった。赤い一点が残った時にはもの大きな闇が広がり、幼い心の中に光と暗さの対比

の美しさと不可思議なところよいやすらぎと「あしたまたね」といういきいきさが残ったように思う。

小さな「線香花火」との出会いの中で大きな宇宙を観ることができた満足と喜びがからだの中に沈潜していまもいきつづけているのだと思う。

生れてはじめて「火」というものを自己の手中にしたその恐ろしさと驚きと神秘さに目を輝かせた幼い子どもたちは森や洞窟や暗夜の中で火を発見した人間にも通じる根源的なものに出会うことができるのだと思うと、「線香花火」は子どもにとって人間の根源的な世界に遊ばししてくれる「小さな火のピエロ」のように思われて来た。(洗足学園短期大学)

ある幼児の死生観

——孫との対話から——

辻 正 三

久しぶりに訪ねてきた満五歳の誕生日を迎えて間もない孫娘が、部屋に入るなり「おじいちゃんはどうすぐ死ぬんだね」と話しかけてきた。還暦も定年も過ぎ第二（？）の人生に入り、折にふれて漠然と死の影を意識するようになっていたわたくしは、一瞬息所をつかれた感じで返事に窮してしまい、ちょっと間をおいてから「ああ、そうだよ」と答えた。孫は、「それからおばあちゃんが死ぬのね」という。そこでわたくしは、「それじゃ、くっちゃん（孫の名）は？」と聞いてみた。すると、「おばあちゃんのあと、ずっとたっておかあさんが死んで、そのまたあとずっとた

ってから、くっちゃんが死ぬの」という答がかえってきた。

一体、幼児は「死」というものをどうみているのであろうか。いくつか質問を投げかけてみたが、きき方がまずかったせいか孫はのってこず、会話はあらぬ方向へ外れてしまい要領をえずに終ってしまった。

その後の母親の話によると、当時孫は「死ぬ」ということが大変気がかりで、しばしば母親に質問していたが、最大の関心は母親の死ぬこと——すなわち母親がいなくなることであり、死そのものが問題になったのではないらしい

のである。そして、そのような「マターナル・デブリヴェーション（母性的養護の喪失）」への懸念が、大きく彼女の心を占めたのは、孫が毎日熱心にみていたテレビの子ども向け連続ドラマの主人公の少女が母親の死に遭遇したことへのアイデンティフィケーション（同一視）のためだったようである。

孫にとって死そのものが問題でなかったらしいことは、それから一か月ほどたつて訪ねてきたときのわたくしとのやりとりからも推察された。わたくしの家には十七歳にもなるおとなしい老犬がいて、彼女が来るたびによい遊び相手だったのであるが、これが彼女の来る一週間ほど前に死んでしまった。わたくしは、彼女が来るなり、「クマ（犬の名）死んじゃったよ。お墓をお庭につくってやったからみておいで」といったが、彼女は「ふうん」といって、窓ガラス越しにチャット庭の方をみただけで、特に目立った反応を示さなかった。手ごろな遊び相手もまのあたりにいなければ、それだけのことといった感じである。「おじいちゃんも、もうすぐ死ぬんだね」とわたくしがもちかけてみても、「うん」と軽くうなすくだけで話につてこない。母親の喪失への懸念につながる「死」ということに対する

強い関心も、どうやら一時的なもので、彼女が熱心にみていたテレビドラマが終るとともに意識の背景に後退してしまったらしい。先日の「おじいちゃんももうすぐ死ぬんだね」という孫のことばに対して、潜在的に「死」を考えだしていたわたくしの方が、どうやら過大に反応したきらいがあったようである。

では、「死ぬ」に対する「生まれる」ということは、孫にとつてなになのであろうか。思いだされるのは、一年あまり前の妹の誕生前後の彼女の言動である。

保育園で最年少組から、つぎの三、四歳児の組に移って一年、そのなかでも年長になったころの孫は、しきりに犬を飼いたがり、また赤ちゃんをほしがっていた。そのうちに、実際に母親が妊娠し、母親は、「きょうだい」の生まれることに対する心の準備をもたせるための働きかけを、折にふれて始めた。そのころ、わたくしの家にやってくる時、「くっちゃんのうちに、赤ちゃんが生まれるよ」といって、大変満足そうであったが、「男の赤ちゃんがいい？ 女の赤ちゃんがいい？」ときくと、「女の子」という。「どうして？」ときくと、「男の子はおとうさんのおなかから生まれるし、女の子はおかあさんから生まれるでしょ。う

ちの赤ちゃんは、いまおかあさんのおなかのなかにいるんだもの」という答であった。

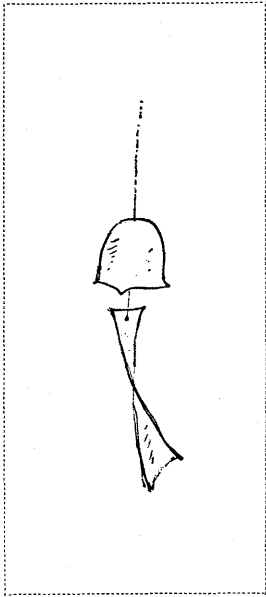
やがて、幸いにも彼女の「期待」どおり妹が生まれ、彼女は六歳のころで、小さい体で抱きたがったりミルクを飲ませたがったりして、親たちをヒヤヒヤさせたが、それもしはしの間でおさまり、しだいにライバル意識やジェラシーを折にふれて示すようになっていった。

妹が満一歳の誕生日を迎えたころのある日、彼女一家がまた、わたくしの家を訪問してきた。彼女の母親が、母親の母親すなわちわたくしの妻と雑談をかわしていて、「わたし、鏡台が一つほしいと思っているの」といった。そばでこれを小耳にはさんだ孫のいわく、「くっちゃんは、も

う「ぎょうだい（兄弟）はいらないわ」

お人形かベットとして待望していた妹も、満一歳を迎えてそろそろ一人前に行動するようになると、満五歳数か月の姉にとっては、いささか手にあまる存在になってしまっただけなのである。

生まれることや死ぬことについての認識も、幼児にとつては、身近にいて自分の必要や要求をみたしてくれる者の存在と喪失に対する自己中心的思考にはかならないのであろうか。ふりかえって考えると、わたくしをふくめた一般のおとなの死生観も、基本的にはこれとたいした違いがないような気もしてくる。



☆講演☆

ビフォア・スクーリング

——子どもの心とからだを汚染から救わなければ——

周 郷 博

本題に入る前に

ぼくは、お茶の水幼稚園をやめて五年になります。渋谷の家で
鳥をやって、時々失敗をしたり、あまりお金もありませんし、い
やになることもあります。ずーっとやってきました。でも、ア
ルジェリアの詩人ナセルディーンさんも言っています。この人
は、世界相互理解連盟なんているのを一人で作ったりした、ちょ
っと変わった人ですが、“おいしい物を食べて何もしないで遊ん
でいると疲れる”というのです。本当にそうですね。食べること

をへらして、自分のすることを一生懸命にする、そうすれば心が
落ちついて、心にゆとりができて、人を傷つけることもなくなり
ます。外山君（外山滋比古氏）は、常識的なことを適切ないい言
葉で表現して、今なかなか有名だけれど、このナセルディーンさ
んの言っていることは、常識とは逆のことです。ここところ、面
白いですね。

ぼくは、去年中国から帰った時、日本の女の人が大勢いるとこ
ろに行っても、それが女ではないような感じ、子どもを見ても子
どもでないような感じ、つまり、人間と会う喜びがないような感
じをうけてたまりませんでした。でも、ついこの間八丈島へ行き

ました。二度もきまった日が天気が悪くて、やっと三度目にプロペラ機で行ったのですが、むこうはあらしでした。そして三泊四日いて、最後の日はいいお天気でした。その八丈島でぼくは、とてもいい人たちとめぐり合いました。というのは、本土の人と違って、無邪気でうそがないんです。そして「昔」をもっといます。つまり大地から離れない生活をしていて、そこが本土の人たちと違う、と思いました。

つい昨日まで、今度は諏訪へ行ってきましたが、そこでもぼくは元気が出ました。諏訪には、ぼくのただ一人のお医者さん、小松先生がいるんです。ぼくはこの先生にしかみてもらいません。ぼくのからだは、そう誰にでも見せるものじゃないんですから……。ところがこの先生が、実は病気をして、その病気がなおったのでぼくに会いたいといったのです。先生はもう診療を始めてるわけですから、それが終わるのを待ちながらずっと分たなくさんご馳走になって、それで夜おそくまで話をしました。この場合、先生は病人であると同時に医者だったわけですね。それで、診察ばかりしていた時にはわからなかったことがわかって、今までしていたことが違っていたのではないか、ということがわかったそうです。患者は医者になつたりよりかかってはいけないのね。患者自身が病気をたたか精神力がなければならぬ、ということが、

患者となつてはつきりしたということです。

こういうこと、幼児と保育者の関係でもいえるんじゃない？

今、現在、育ちつつある幼児の側にたつて考えるというかわり方、これが今はよそよそしいものになつていっているような気がします。親子でも同じだと思います。そして——「今までのきまりきった教育」というワクからはみ出さないと、「本当の教育」もわからないのじゃないでしょうか。小さくこり固まった頭を、人生というか、世界へ向かつて開放して風にさらすことが大切だと思います。「風に吹かれて」のボブ・ディランとか、ジョン・デンバーのように、人にへつらわないで、あまりペラペラしゃべらないで風に吹かれる、それがいいですね。

だいたい横道にそれました（道草）が、今日話したいと思つていたことに入ります。

◇ ◇ ◇

岡潔先生も、なくなりましたね。その岡先生は、人間の中心は情緒である、といわれました。その上に脳 Brain があるのです。情緒は Mind（英）Le cœur（仏）です。そして情緒と共に意志欲望があり、それらをつつむからだがあるわけです。

諏訪に行った時、あたりの景色を見てふっと実朝の歌がう

かびました。実朝は源頼朝の息子で、鎌倉で殺されましたね。でもあの公暁の隠れていた大銀杏はまだあります。その歌は「けさ見れば 山はかすみて久方の 天の原より春はきにけり」というのです。誰でもできそうな歌だけれど、実に情緒がありますね。「天の原から春がくる」これは日本独得のものなのです。外国では「地平線」というのが多いのです。

この「情緒」というのは、子どもが生まれた時、からだと一緒にもつてくるものです。「宇宙船地球号」という呼び名の張本人アメリカのバクミンスター・フラーも、この惑星―地球号の未来を確かなものにし得るものは、BrainではなくてMindである、といっています。パスカルもパンセの中で、「理性の与りし^{あず}らないろいろなことを解決するのが情緒 Le cœur である」といっています。ですから、あまり早くから頭にいろいろつめこむと、あとでほんとうのもの（真理）が入ってくる余地がなくなってしまう、（入り口がふさがれてしまう）、これは胃袋も同じです。脳という腹は、すかしておいた方がいいのです。

教育雑誌を見ましたが、いろいろ考えさせられることが出ています。宮城教育大学の林竹二先生は、「人間はほかの動物とどう違うか」という授業を百回以上もして全国を回っている人ですが、これはベトナム戦争後のアメリカでもとりあげていて、こう

いうやり方はいいと思います。

それから、家庭の役割の重要さの認識も、もつともつと考えられなければいけません。殺人事件をおこした中学生の家庭、あれは家庭じゃありません。喫茶店や売春宿のような家庭がふえてきています。もちろん、昔とは違った家庭であるべきですが、大切なことは、家庭が愛によって結ばれているかどうか、です。そして、そこに生まれ育っている子どもが、親を信頼しているかどうか、ということです。ですから、「人間」に驚きを見いだすという、林先生のような授業がよいということです。

それから驚いたことに、一歳半の保育園児にして、もう何の意志もなく手足がなえた子、ゆうれいのような子がふえているというのです。それで思い出すのですが、ぼくが園長をしていたころに、卒園児が園長室に来て、「園長先生、ながながお世話になりました」といいます。これがMindから出た言葉でしょうか。

つぎに、虫歯の多くなったこともたしかな事実です。歯というのは骨ですね。したがって骨もとても弱い。そしてからだが疲れやすいのです。ことに背筋力がきたえられていないのだと思います。四つ足で歩いていたものが、人間となって初めて立って、「遠くを見る」ことができ、「手を使うことを覚えた」のです。そしてこそ intelligence が働き出すのです。この言葉は、ラテン語

の ingenuity 創り出す、ということからきています。ピアジェも今では intelligence も知能テスト用になってしまった”といっています。

それから、反射（本能）も弱っているのです。この“反射”というのは一つの本能で、本来知能は本能に根づいて発達するものなのです。何かが突然目の前にあらわれても目をつぶらない。すぐころぶ。そしてそのころび方も大変まずい。この状態はずっと、中学生までつづいています。そして、家庭まで学校の延長になっているのが現状です。

ここでぼくは考えるのですが、家の裏に、五歳になる直子ちゃんという子がいます。その子が“死にたい”といい、“どうしたら死ねるか、走ってくる車の前に出たら死ねるかな”というそうです。幼稚園で“みんなは大きくなったら何になりたいか”と先生が質問したそうです。“幼稚園の先生”という子が多くて、先生は喜んだらしい。そして直子ちゃんの番になったら“わからな”“い”“といったんだそう。そして先生は“明日までに考えていらっしやい”“といったそうです。先生が喜ぶようなことをいう子どもより、ずっと直子ちゃんはいい子です。直子ちゃんは神経—感性が健康なんです。だから“死ぬ”ということも考えるのだと思います。五歳です。



ともかく、そろそろ学校信仰をやめるべきです。これに似たようなことは、永井道雄もこのごろいい出しています。

大部分の動物は、遺伝されたものをうけついで生きてゆくことができます。でも人間の場合は、“装置”として遺伝されたものを、使わなければ、それも順序をへて使わなければ、それは腐敗して、こわれてしまうのです。外山君のいうマタニティー・スクールの必要性もここにあると思います。順序をへる、つまりつめこんではいけないのです。かといって、子どもが好んでやることをとめることもいけません。しかし、からだがよくなければ、心も初期段階の発達ができなくなるのです。からだと心は不可分です。妊娠中はもちろん、お母さんの血は赤くなければいけないのです。このごろの若い女の人の血は、黄色いというではありませんか。

そして、子どもが生まれたら、おっぱいを飲ませながら子どもの目を見て“母乳語”を話し、つぎに“離乳語”にうつってゆく。これはまさに、外山君のいう通りだと思っています。この離乳語が、いわゆるおとぎ話の時代と重なり、夢み能力をつちかうのです。ベッテルハイムさんがこの間日本に来ましたが、彼はこうい

う質問をしました。”日本の親は子どもに inner-most self をどう伝えていくか”と。訳が心の奥にもっと最も大切な考え方とでも訳すのでしょうか、日本の親はこんなことはしていないと思います。でもこれは大切なことです。子どもはわかるのです。いわゆる sensitive period (敏感期) にある子どもには、よくわかるものなのです。ベッテルハイムさんと話した時に一緒だった松岡享子さんの話では、波多野 (完治) さんの名でそのうち “Use of Enchantment” (魔法の効用) という本が出るはずですが、enchantment と entertainment は全く違います。

子どもに一つの信頼と勇気と決断を与えるのが enchantment です、子どもは何度もおとぎ話をせがんで、その中で自分をたしかめ、また “まっ心” も出てくるのです。entertainment は、ただ “おもしろ、おかしい” 気散じをするだけです。『誰も知らない小さな国』の作者佐藤さとし氏は、幼年時代についてこう書いています。“幼年時代とは、どういう風景——世界観の model を心の中に子どもの眼と心でつくりあげ、もつことができるかの、かけがえのない一時期” だと。いまのような「現実」では不可能といえますね……。心の棲む場所——世界がどこにもないのです。そこで、反逆、自殺……さまざまな不幸、禍いが出てきてやまないのですね。

まだ、いいたいことをつくしていませんが、要は、情緒の棲み家に値するような「からだを作る」こと、これをもっと真剣に考えなければならぬということです。みんなも、今日から少し食べることをへらすことから始めたら？……からだが疲れないで心が生き生きとするとと思います。

(一九七八年三月十一日、みどり会で行なわれた講演より)



幼児たちから学ぶかずかずのこと④

——水色のノートから——

丸山ふみ

夜の幼稚園

幼児たちといっしょに一度は見たいと思っていた西の空が、夕やけで美しくなってきた頃から幼児たちが父や母に連れられてやってきました。

「夏休みに子ども等を喜ばしたるや」というPTA会長の一言が具体化された納涼親子会のことです。

ゆかたを着せてもらった真理子は母親に身体をすりよせて恥ずかしそう、お父さんとベアの半ズボンで嬉しい顔の和也などどの顔もすごく新鮮なのです。

地区での子ども会活動が活潑になり、園児も小学生の仲間に入れてもらって催される花火大会や盆踊りに地区担任の先生と一緒に参加する時感じるのですが、幼児の表情が平常幼

稚園で見なれている顔と一味違うのです。

ところが、この宵の幼児達の表情はその時よりも幾倍も生き生きしていて、そのことにまず感動してしまいました。

幼稚園へ十数日ぶりにやってきた幼児達は何を期待しているのか一瞬とまどいましたが、「先生、子どもより大人の方が喜んでるのよ」とくつろいだ表情のお母さん、夜の幼稚園を楽しませてやろうと電気工事を仕事にしている容子のお父さんが付けてくださった保育室のテラスの沢山の赤、緑、黄、青、白の電球など、幼児を迎える雰囲気や初めての試みに張切っているPTA役員、職員たちの気持が幼児にも伝わっていったと思うことにしました。

フォークダンス、しょうがい節、映画などを親子で楽しみ、帰りに「お楽しみ袋」をもらうという大人の企画したプ

プログラム以外に幼児達が楽しんだのは暗闇でした。

月の出のおそい夜だったので、二基の投光器と、絵本『モチの木』の豆太のみた木のようにと願って付けていただいた五色の電球のとどかない場所で動きまわる幼児の姿に、自分の幼い日を重ねて今夜のことはそれぞれの幼児の思い出になるのではないかと思いました。

スベリ台の上から懐中電燈で友達に合図をおくっている明宏や自分達だけでは少々怖いのか、園舎の裏へ小学生のお兄ちゃん達と探検にいき、「先生、お化けおらへんよ」と得意そうに報告している浩樹をきまり悪げに傍に立ってみている小学生も含めて、暗いということが遊びをつくってくれました。

「先生もいこや」と文子に誘われて私も暗い場所へついて行きました。母親から借りた懐中電燈を手に、足早に歩きながら文子のおしゃべりはつづきます。後から私がついてくるのを確かめるように返事を待つような言葉がつづくのです。

暗闇を歩きながら私も経験したのは靴の底に伝わるさまざまな感覚でした。ゆかたを着ているのに、サッサと歩いてい

ける文子の足元を見て意外に思ったのは運動靴を履いているのです。

幼児の足元

舗装された道路ばかりを歩いてくる幼児達のためにと、門の付近には小石を、園舎のまわりには砂利を敷き、五月後半からは砂遊び場では素足か、ビーチサンダルを使わして幼児達の足の裏にいろんな経験をさせているのです。

この夜も夜露に濡れた草の上や暗いから凹凸のみえない園庭を歩くことを幼児が経験したのですが、舗装された道路を歩くのちがって土の上を歩くということは、土が幼児の足を受けとめてくれ、その硬さや柔かさが幼児の足に何かを学ばせてくれるように思われてなりません。

ぬかるみに足をとられて困るということが幼児の足元から無くなった今の生活、歩きなれない履物では交通量の多い道路が危いという親心が、ゆかたに運動靴ということになる幼児の生活の中へ、二学期の幼児の活動の計画に新しい課題が生まれました。

(大阪市立松江幼稚園)

線香花火をたずねて

皆川美恵子

子ども時代の夏の夜、庭先の夕闇の中で、花火をしたことがないという人も、まれなことでしょう。

さてその花火の代表は、何といっても線香花火ではなかったでしょう。静かに、ただじっと持っていればよい線香花火は、小さな子どもでも安心して遊べる、優しく美しい花火です。

この線香花火は、一体どのように作られているのでしょうか？
線香花火の職人さんとは、どんな人達なのでしょう？

私達は、大きな文化の蔭に隠れて、子どもたちの遊びをささやかに支え続けている、職人さんの姿といったものを、これからシリーズで探訪してみたいと考えています。

その第一回として、線香花火をとりあげました。線香花火を作っている人を尋ね求め、長野県は長野市の北上玩具花火製作所、北上松三郎さんをお訪ねし、いろいろとお話を聞かせていただき

ました。

北上さんの家

北上さんの家が花火師となったのは、おじいさんの代からで、おじいさんは、本所にあつて今はつぶれてしまった蜂谷^{はち}という花火屋で修業をされたそうです。そしてお父さん（五三郎さん）の代の時、独立して、亀戸に北上玩具花火という店を構えました。

線香花火は、火薬の配合を花火師がやり、紙も染めて、ただ燃りこむだけにして手内職に出します。細長い紙に火薬を巻きこんで、こよりを作るこの燃り子の内職は、当時、大島、市川、船橋あたりに頼んでいたそうです。

お父さんの時でも、東京で線香花火を作る人はだんだん少なく

なり、とうとう北上さんのところ一軒になってしまったそうです。そこへ関東大震災（大正十二年）にあつて家を焼かれ、燃り子さんを捜すにも東京周辺では難かしくなってきたこともあり、長野へ移り住むことにしたそうです。

雪国の花火

長野は、線香花火が盛んに作られている地でした。しかし、
“だるまより”という、粗悪な線香花火が作られていて、悪いということにかけて評判のところでした。北上さんのお父さんは、燃り子さん達に、火薬を巻きこみ、燃りこむ技術を伝え、いい線香花火を作る指導をしていったということです。その苦勞が実つてか、長野の線香花火は汚名を返上していきました。

長野では雪の降る冬季になると、閉じこめられた家の中で、内職仕事として、村中の人達が線香花火を燃りました。小学生の子ども達も、親の手仕事を傍で見え、燃っていったといいいます。線香花火は万が一火がついたとしても、爆発するとかいった危険なものではありません。みんな炬燵こたつに足を入れ、色鮮かな薄紙に火薬を燃りこんで、夏の夜のとぎめかしい一瞬の光の世界を作り出していったのです。

こういう話を聞いたせいでしようか、線香花火のチッチと出る赤い火の花が、雪の結晶の形に見えてきました。雪の降るなか、静かに燃れた線香花火には、いつか雪の一ひらの美しさまでが閉じこめられてしまったように感じられるのです。

昭和はじめの景盛期

今から五十年前程前の、昭和のはじめ頃が、北上玩具花火の、そして信州の線香花火の最も花々しい時代でした。長野県は当時、全国で生産される線香花火の八割から九割を作り出していたのです。その頃は燃り子さんもたくさんいて、雨宮あめのみや、生萱いきがや、倉科、土口、森といった村々では、盛んに線香花火が燃られていたそうです。

多くの燃り子さんがいたことの他に、その当時は材料が良かったといえます。線香花火は、中に入れる火薬の配合と、紙そのもの、そして燃り方と、この三つのバランスによって、良いものが生まれてきます。

当時は、マニラ麻の入った紙が使われており、この紙は燃えると麻が灰になり、その灰が火薬に作用して、美しい火花が出たそうです。しかし今では、マニラ麻の入った紙はなくなっています。

い、新改良の薄洋紙になってしまいました。

火薬は、硝石、硫黄、松炭の三味を配合した、火薬として最も素朴な黒色火薬です。この中で松炭が一番の要^{かな}となります。松炭が悪いと「花」の出も悪く、ボトリと玉が落ちてしまうそうです。松炭は、赤松を焼いて作った炭を細かく砕いたものですが、暖かいところに生い育った赤松の方が年輪も少なく、やわらかく、細かな粉になりやすいので望ましいそうです。

昔の花火職人は、炭まで自分で焼いたそうです。お父さんの時は、もう焼かれた炭を仕入れ、挽き臼で砕いて使っていたといいます。しかし、北上（松三郎）さんの代になると、炭の形では来なくなり、粉々にされて袋詰で入ってきます。こうなるともう、それがはたして百パーセント赤松の炭かは疑わしくなり、材料の吟味はできなくなってしまっているといっています。

一本一本ちがう線香花火

硝石が吹き出し、硫黄がまき上げ、そこで赤い丸い火の玉がつけられます。松炭の粉は燃えて松煙となり、はじけて火花がきれいに出来ます。火鉢が使われていた頃、炭をつぐ時に粉が入って、パチパチと火の粉が飛んだことを覚えていらっしやるかと思いま

すが、あの火の粉が花になるわけです。

北上さんは、おじいさん、お父さんから受け継がれた秘伝で、硝石、硫黄、松炭を配合してゆきます。しかし、線香花火とは不思議なもので、同じ時に作った同じ火薬をつめても、紙の撚り方で、ひとつひとつ花の出方が違ってしまいます。いくら熟練した撚り子さんが撚っても、こよりを作り出す、手の先の絶妙な動きは、二つとして同じこよりを撚ることがないのです。

ですから、はたして花が美しく出るかどうかは、火をつけてみなければわからないことになります。線香花火は一本一本、その時その時に、それぞれに火の玉をつくり、花を出し、消えていくのです。きれいな花をたくさん出すには、火薬を多くいれても駄目で、あくまで火薬と紙と紙の撚り方の、三つの均整がとれていなくてはなりません。しかしこの三つの関係のはっきりとした物理的、化学的な理由はわかっていません。北上さんも配合はしているけれど、どういう訳なのかはわからないといっています。

しかし、それにしても、昔の線香花火はきれいだったと思われる年配の方がいられるとしたら、どうやらそれは本当のようです。美しかったのは何も幼い日への郷愁だけではなく、当時は、松炭といい、紙といい、最良の材料が使われていたのですから、最も美しかったはずなのです。残念ですが、現在は、代用品

の時代なのです。

線香花火の将来

線香花火は、長野県のほか、愛知県、福岡県で作られています。その生産高の割合は、福岡が八十パーセント、長野が十五パーセント、愛知が五パーセントです。五十年前には、八割から九割を作り出していた長野が、数の上でも大きく後退しました。

北上さんのように、通産省の国家試験や消防法の試験を受けて合格し、免許資格をもって線香花火を作っているのは、全国で六、七人位だということです。

花火師が少なくなっていますが、何といっても撚り子さんがないということが、一番の痛手ようです。現金収入のなかった農家の人は、冬の農閑期に内職仕事として線香花火をつくりました。しかし今では、近くにできた工場にパートで働きにいたり、出稼ぎに出たりしてしまします。千二百本の線香花火を撚って三百九十円という工賃に、今では誰も魅力を感じないのです。

北上さんは撚り子さんを捜して、新潟県に近い横倉という村や、長野県でも秘境とされている秋山郷にまで足をのびし、何と

か撚り子さんの確保に努めています。息子さんが後を継ぐそうですが、撚り子さんがいなくなれば、やめるより仕方がないでしょうねと、北上さんは淋しそうにおっしゃっていました。

現在では、中国製の線香花火が増えているそうです。これは、中国の安い労働力を利用して、日本の大きな花火業者が向うへ行つて、作り方を指導して作っているのだそうです。ですから、日本独特の線香花火が、もしかするとみんな中国製という時代が、やってくるのかもしれませんが。

北上さんは、次のように言っていました。

——僕なんか中国行つてやりたい位ですよ。中国の方が教えられるまいかもしれない。要所さえ教えれば……。ただ本心に教えないから、色も悪いしね。

——本当はね、筆のように太くて、先の方にいつて細くなるのがいいんです。ずっと燃えてきて、固くなって力が出る、それがいいのね。

私達は、北上さんの家の庭になったという杏の実を御馳走になりながら、いろいろお話を聞いてきました。次に、前もって、お願いしておいた、線香花火が実際に作られるところを見せていただきました。北上さんは、私達の願いに応じ、長野で一番上手に

線香花火を燃る人を、呼んできて下さったのです。近藤梅野さんというその人は、杏の里として名高い森村の隣、雨宮の方です。

近藤さんの手際

近藤さんは、膝に、木でできた菓子箱のフタのようなものを置きました。その中には、黒い煙硝（火薬）の入ったカンと、松ヤニの入った小さなカンがあり、フタのようなものは、煙硝がこぼれて、まわりを汚さないための台になります。

まず、こよりを作るのに指がすべらないよう、松ヤニを指先につけました。この指に松ヤニをつけるといいことは、北上さんに教わったということです。

次に、きれいに染められた長細い紙の、やや幅の広い方を左手に持ちます。そしてその広い部分に、粉の煙硝を置き、左手で巧みに捻り込みながら、右手も使って、細い細い、ピンと張った針金のようなこよりを作っていきます。このように、近藤さんの手によって見る間に、いとも簡単に捻り出されたこよりこそが、線香花火なのでした。

煙硝をすくう匙の柄は、匙をいちいち置いたり、とったりする手間を省くため、右の薬指にはまるよう、丸くなっています。こ

の小さな匙で、ちょうど一本分の線香花火の煙硝がすくえるようになっていのです。北上さんに尋ねると、〇・〇三グラムということでした。

下手な人が捻った線香花火は、台の上でトントんと整えると、黒い煙硝が落ちてくるそうです。また、こよりがブカブカで、ピンと堅いこよりになっていないそうです。

近藤さんの捻った線香花火は、煙硝がしっかりと捻り込まれており、堅く細く、ピンとまっすぐで、一級品です。悪いものと手元で比べてみると、その太

注意とお願い

さ、長さで一、火気に充分注意し災害を起さない様にして下さい

目瞭然でし二、材料はよく整理して無駄のない様にお願います

た。下手な人のこよりは、一、より方は固く仕上げは立派になる様努めて下さい

のこよりは、一、薬は適量（多くなく少なくなく）に入れて下さい

太くなつてしま、一、劣りものにならない様を不良品は特に作らぬ様お願いします

まい、その分、短かくな●不良品には工賃割引と支払えない場合と材料御遠慮申しますので御了承下さい

です。

北上さん

各位

1. 先から②コぼれ品様に
2. ③劣り品は少くなく
3. ④板を堅くする

4. 余たい堅くより仕上げく



は、皆が上手に燃れるよう、図のような注意と、燃り子さんへのお願いを印刷して配っています。

でき上った線香花火は、十二本が一束となり、その小さな束が五つ（六十本）で、大きな束一つとなります。そして大きな束が箱の中に二十束（千二百本）詰められ、「ほまれ桜」として出荷されています。

近藤さんは、この一箱分千二百本を、四時間で燃ることができるといいます。つまり、一分間で五本を燃り出すことになりま

す。長年の内職で身についた、全くあざやかな手の動きです。繰り返しますが、こうした一箱分千二百本の工賃が、三百九十円なのです。そしてお店で私達は、その一箱を千円で買うのです。それにしても、今どき、手作りの、こんなに美しい火の松葉を咲かす線香花火を、一本一円以下で楽しめるとは、何としあわせなことでしょう。

私達がじっと手元を見つめるなかで、近藤さんは、次から次へと線香花火を燃っていきます。色鮮やかな線香花火の山は、どんどん大きくなっていきました。見とれてばかりはいられません。私達は近藤さんにあれこれ尋ねてみました。

近藤さんの話

——私、全然やったことがなくて雨宮あつみやというところへ嫁いたの。ところがねえ、お父さん一人の稼ぎなわけだけど、そのお父さんの職がいい職じゃなかったから、お金が少なかつたわけね。その時、こういうのをやったらどうかと教えてくれる人がいたわけ。その当時は安かつたんだけど、それでもやれば何かの足しになると思ってやったの。

教えてもらった時は、この手の中マメだらけ、叱られて一所懸命やったの。その教えてくれた人は、沢山できると、自分も儲けになったみたい。

——嫁いでの話だからさ、二十七年ばかなるよ。ずっとはやってなくともね、やめっこなしね。

肩こる人は荒っぽくなっちゃうから、駄目でしょうね。私そういうこと全然ないの。おもしろいせいか、夜なんか、いつもでもやってるの。

私、一日にやろうと思っててもね、千二百を三把び、それ位だね。だけどこれが安いとか考えたことないね。金銭問題でさ、安くてこれは内職に向かないとかさ。

若い人は、一日出りゃいくらになるとか考えるから、そばでやっていても、やる気ないね。見ていたってやらないねえ。

——買う人の身になってやらなければねえ、自分ばかりお金になりゃいいというもんじゃないからねえ。だからここ（煙硝を入れてとめる根元を見せながら）を完全にやらなくちゃねえ。

——昼間は会社行っているから。でもこうしてお金を頂くこともさ、とても助かるんだよ。そしてその都度頂けるでしょ。会社に勤めて何万と頂いてもね、この金はとっても有難いと思っている。ちょっとのすき間にやった仕事でしょ。だからあんまり使えない。

——それこそ張りあいだね、取り来てくれれば、もういくらになるという気持で……。来てくれた時は、もう少し頑張つてやっておけばよかったなんてんだ。

このお金は尊いもので、それこそ簡単には使えないね。かえってお父



さんに働いてきてもらった金より尊いからね。だから、これは絶対に出不さんないよ。自分に貯めてというか、そういう気持ちになるね。苦勞してやるんだから……。

美しい一本一本のこよりに二十七年間、近藤さんは、どんな気持で向かい、紙を細く撚り上げ続けてきたのでしょうか。

せつせと手先を動かすことで仕上ってゆく、夏の夜の子どもの花火作りが、どのように近藤さんの中で安らいだ気持ちになっ

ていったのでしょうか。
何はともあれ、こうして子どもたちは、今、その線香花火を手

日本煙火協会

北上さんの家族の方々、それに近藤さんの協力によって、私達はこのように取材を終え、帰ってきました。次に記事を書くにあたり、いま線香花火がどの位、生産されているのか、又、線香花火はいつ頃から作られるようになったのかを知るため、日本煙火協会を訪ねました。

日本煙火協会は、松尾義雄さんという、相当なおとしのよう

すが、電話の前に坐って現役で活躍されているおじいさんが、取仕切っていられます。北上さんを紹介して下さったのも、この松尾さんでした。

早速、線香花火の生産高を尋ねてみると、おもちゃ花火の生産高はわかって、そのうち線香花火がどの位かは、正確につかめないということでした。しかし、推量するなら、小売価格での売り上げが一年間で一億五千万円位だろうということでした。

さて、松尾さんに線香花火のことをいろいろと尋ねていて、思いもかけないことを知らされました。関東と関西では、線香花火が違うのだということです。この世の中に、紙でできた線香花火のほかに、もう一つ線香花火があるということです。「本当ですか！」と声が上ずる位、私にとって驚きでした。

松尾さんの話では、関西の線香花火は、畳表にする蘭草^{らんそう}の先や稲の藁^{わら}の先に、火薬をつけたものだといいます。関東に広まっている線香花火は、粉の火薬を紙^{かみ}によりに巻きこみました。しかし、関西のは、火薬を泥薬にして、蘭草や藁の先に黒く塗りつけるのだそうです。

関西の線香花火は、大阪、九州で多く作られています。火薬を泥薬にするのは危険なため、手内職ではなく、昔から工場で作られてきたそうです。

長野の、手仕事でしか作ることでできない紙燃りの線香花火は、人手が少なくなってしまう現在、生産が急激に落ちてしまっていました。しかし、関西の線香花火は、工場で大量生産されるため、今でも多く作られているということです。

二つの線香花火

なにはともあれ、関西の線香花火を見てみたいと思い、浅草橋のおもちゃ問屋に行ってみました。なるほど蘭草の先に黒い薬がついています。赤、緑、黄、桃といった華やかな線香花火を見慣れている目には、素朴にも、質素にも感じられます。お店の話では、この品は、東京では置いても売れないとのこと。逆に関西では、紙燃りの線香花火が売れず、この品がよく出るということでした。

関東と関西の二つの線香花火をもって、まわりの人に、どちらが線香花火かを尋ねてみると、富山、兵庫、京都といった西方の出身の人は、蘭草のを線香花火と言ひ、東京、新潟、北海道といった東国出身の人は、紙燃りのを線香花火と言ひます。どうやら線香花火は、西と東、二つの文化ではっきり分かれるようです。

私達は、線香花火の探訪をするにあたって、紙燃りの線香花火

しか頭にありませんでした。しかし、関西出身の方は、この記事のはじめを読んで、私達の線香花火とは違うなとおかしな気持ちをもたれたことでしょう。

考えてみれば、人と人が出会い、幼い日をどのように過ごしたかを語り合うのは、明日に向かって忙しく生きている私達には稀有なことなのかもしれません。ましてやその子ども時代、夏のひとときを、どんな線香花火で過ごしたかを語り合うのは、稀有なことの中の稀有なことと言えるでしょう。

蘭草の線香花火で遊んだ関西育ちの人達は、あれこそ線香花火と思い、紙撚りの線香花火で幼い日を過ごした関東の者は、これこそ線香花火と思い、それぞれが、それぞれの線香花火の思い出をもって、生い育ってきたようです。線香花火が、西と東という二つの文化を背負っていることには少しも気づかずに。それにしても誰でもが知っている線香花火がこのようにかけ離れているとは、線香花火が、幼い日の暗闇で、一瞬美しく散り輝いては消える、ささやかな、ささやかな片隅の遊びだと言えるのでしょうか。

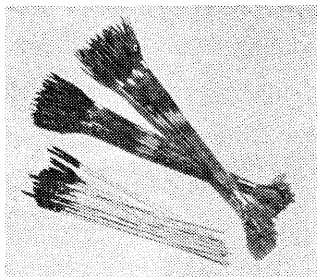
スボ手ぼたん、長手ぼたん

さて線香花火と一口でいっても、二つの線香花火は、持ち方か

ら、花の出方と大いに異なります。関西の線香花火、関東の線香花火と言っているのは、まだろっこしくてなりません。そこで、おもちゃ問屋さんが呼んでいるように、関西の蘭草や藁を使った線香花火を、スボ手ぼたん、略して「スボ手」、関東の撚りものの線香花火を、長手ぼたん、略して「長手」と呼んで話をすすめることにしましょう。

「スボ手」のスボとは、「窄む^{すま}」から来た語のようで、細長く、穴のあいているといった意味があるようです。藁、葦、藁などを言ったものと思われます。この「スボ手」は、斜め上向きに持ちます。そして、火がつくと、ジュッと勢いよく火を噴き出し、盛んに松葉が出ます。初めがはなばなしくて、すぐさめやすい人を線香花火のようだ、と言いますが、どうもこの「スボ手」のように思われます。

しだれ柳が出て終りになると、蘭草の小さな管から出たモウモウとした煙で、手が臭くなります。慣れない者が臭いというだけで、人によれば勿論懐しい匂いであるはず。この蘭草の燃えた匂いを初めて嗅いだ人が、「狼の匂い



みたい」と言っていました。

“長手”は、“スボ手”より長いことから呼ばれたのでしょうか。十五・五センチメートルに対し、二十一センチメートルと五センチ以上長めです。これは、下向きに持ちます。燃りが効いているため、火の伝わり方も一様ではなく、チチチ——チチ——チチと松葉と松葉に間が生じます。燃りは一度に噴出する力とめて、起伏をつくり出しているのです。

“長手”の特色は何といっても、こよりの色どりにあります。赤、緑、黄、桃といった鮮かな色は、たぐ瓜や独こ染、リリアン、海はおずきの色であり、弟、妹と奪い合ったそうめんの幾筋かの色です。これらの色は、子どもたちにとって、胸がふるえる位に美しい、魔法の色なのです。

さて、“スボ手”と“長手”、どちらの線香花火が古いのでしょうか。

蘭草を用いた上向きに持つ線香花火に比べ、下向きに持ち、燃ることで力をとめた線香花火の方が、女、子どもでも、たやすく遊べる、より安全な花火と言えます。それに子どもたちの色に染まった線香花火には、文化文政の華やかな時代の影響が感じられます。

ですから私には、“長手”の方が、“スボ手”のあとに生れたも

のと思われてなりません。しかし、このことは、まだはっきりとはわからないことです。燃りものの“長手”の方が先だと考えている人もいます。

最後に、皆さんは、“線香”という名がどうしてついているのか不思議に思わなかったでしょうか？ 東南アジアを旅行したところのある人が、はじめて、関西の“スボ手”の線香花火を見て、これは、向うの線香にそっくりだと言いました。その人によると、東南アジアの線香は、キリタンボのように、木の周りに香料が塗りつけられているのだそうです。

下向きに持つ紙燃りの“長手”からは、線香という言葉は出てこないと思います。そういうこともあり、“スボ手”の方がまず線香花火として古い形なのではないかと考えています。線香花火の歴史は、説明していると、まだまだ長くなってしまいます。ですから詳しいことは次の機会にまわすことにしましょう。

ただ一本の線香花火に、火薬を中心とした鉄砲などの軍の歴史、又、一年に一度祖先の霊が帰る盆の供養という宗教の背景、それに喜々として興ずる子どもの遊びが、互いに織り混ぜられていることは、注目していいのではないかと思います。夏の夜の片隅の、子どもの手遊びである線香花火には、意外にも大きな文化が潜んでいそうです。

線香花火の思い出

高崎 斐子

現在お子様方の夏の夜のお楽しみと言えば、どんな物がお有りなのでしょう。TVの連続物か？ その他色々お有りと思いますが、さて、私には見当が付きません。私の子どもの頃、それは明治三十年代の事ですが、夏の夜、家での楽しみはまず花火。花火にも種々有った様でしたが、子ども達には線香花火が一番安全だということでした。私達はセンコウ花火と言わないで、センコ花火と詰めて呼んでいました。

当時神田小川町通りを南に一寸曲って行った所に、五十稲荷（ゴトウイナリ）というのが有りました。今でも有る

様です。この稲荷様の御縁日は毎月ゴとトウの字の付く日になっていました。私と弟は其日になると「今晩は五十様ヨ、連れて行って」とおねだりをしたものです。時には父や母が団扇など手にしながら涼みがてら連れていってくれましたが、他は女中について行って貰いました。

家は駿河台（現在日大の有る辺り）でしたので、夜ともなれば、ひとときわ淋しく人通りも稀れで所どころにガス燈がボンヤリ灯っていて薄暗く、女の一人歩きは危いと言われていました。行き交う人の顔もはつきりせず、何とも私は怖くて怖くて、大人の袖先きをしっかりとつかんで内心ビ



クビクしながら歩いていた事を思い出します。

暫くして小川町の灯が見え初めに明るく人通りも繁く
なると、ホッとしました。ずらりと並んだ夜店には金魚屋
あり、ほおずき屋有り、ほおずき屋には赤い丹波ほおず
きも並んでいました。虫屋はうす暗い場所に陣どつていま
した。螢は青い光を放ち、松虫鈴虫ガチャガチャなど賑や
かに鳴いていました。カブト虫はいなかったと思います。
その他耳栓で聞かせる蓄音機屋などもありましたが、私達
の足は花火屋の前で止ります。

長いのと短い線香花火を買います。花火屋は新聞紙で貼
った袋に入れ「ヘイ花火」といつて渡してくれます。煙硝
(先のふくらんだ所に入っている黒い粉を私達は煙硝と呼
んでいました)の入っている方にかすかな重味を感じなが
ら、しっかりと手に持ち、帰りは怖さも忘れイソイソと家
に着きます。

さてそれからが楽しみのクライマックス。ランプを隣
室に遠ざけ、用心のため水を入れた小桶を調とよえてから、岐
卓提灯のついている縁先きに父や祖母の使っている煙草盆の
火入れを借りてきて、その炭火でつけるのです。手に持つ
方が細くて先の方が太いのでフラついて中々火が付かない

時もありました。

火が付き始めるとジュウ、ジュウといつて煙硝の匂いが
し始め、火の玉が出来始めます。玉が大きくなり始めると
大急ぎで手を縁の外へ伸ばします。やがて火玉からシャ
ッ、シャッ、シャッシャといいながらあの美しい火花が四
方へ飛び散ります。長い方の火花は長いだけのことはあつ
て火花も一段と大きく、摘んでいる指先きに多少の反応を
感じながらあかずそれを眺めるのです。そのうち火花もだ
んたん衰えはじめ、終りにはスイスイと細い火が流れ始め
ます。私達は「もう薄の葉になった」といつて手を放し、
土の上に落すのでした。

中には火が付いてもそのまま火玉が育たずジュウといつ
て灰の上に玉が落ちてしまうものもありました。皆はそれを
落第玉だなーと言つて笑いました。そのうちに今晩はこれ
でおしまいという大人の声で心残りながら明夜を楽しみに
寝につくのでした。俗に「線香花火の様だ」とすぐ消える
ことを申す様ですが、どうしてどうして八十五歳の今日に
なつても、子どもの頃のあの線香花火は私の心の中に消え
るものではありません。今改めて感じました次第です。

線香花火

チチカ チチカ スバ スバ スバ

ジュワーン……ジリジリ……ポトン！

線香花火の一生は、とても短い。しかし、とても美しい。おしまい、ポトン！ とちいさな「たま」がおちるまで、花火をもつ人を飽きさせることはない。私は、どんなに華やかな花火があっても、数本単位でかたまっている、なんとも頼りなげな、この花火たちが好きである。

◇ ◇ ◇

川の流れのようにとぎれなくみえるフィルムも、一こま一こまを切ったり、つなげたり、いれかえたりする編集の作業を経てつくられるが、一こま一こまに、微妙な変化が記憶されていて、その意外な美しさ、面白さに気付くことが多い。線香花火は、その



豊田麻江

一こま一こまを、美しく生かしてくれる素晴らしい素材である。

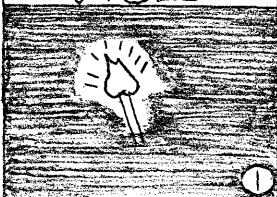
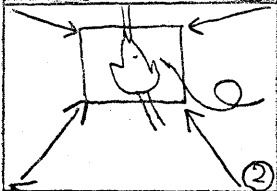
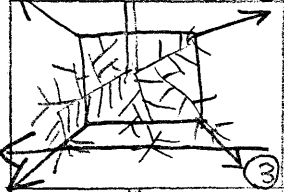

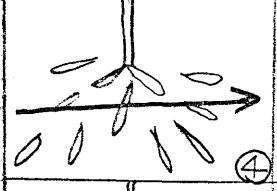
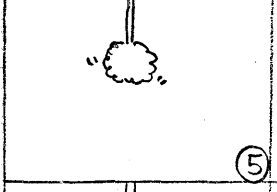
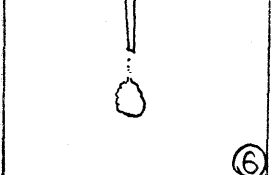
線香花火という、視覚的には、闇の中で踊る「ひかり」の微妙さを、聴覚的には、「チチカ チチカ……」というおかしな「おと」を連想する。次に、紙面の関係で、かなり省略してしまったが、その「ひかり」と「おと」をテーマに、線香花火の一生をカット割りしてみた。

静止した6カットから、「ひかり」と「おと」によって、線香花火を燃えたてていただけたら……と思う。

フォロー……人物や移動する物にカメラをつけていくカメラワーク

ズームイン（アウト）……カメラが動かずにレンズの画角を変え

パン……カメラを左右に振ることで被写体の動きを追う

VIDEO	VIDEO	AUDIO
	くら(い)というより、くろ(い) という方がよいあ うな 夏の夜 ポッ! 急に火燃える マッチ出現!	(テレビジョンなし 生音のみ) かす。 S.E. ポッ! (マッチ点火の音)
	マッチ フォロー 線香花火に点火 その瞬間、花火の 先に Zoom-in!	S.E. 花火に点火される音
	光、画面にいっぱい ゆっくり Zoom-out 左パーン。  光と闇の夜叉	S.E. 千カチ千カチ... 生音
	③と同サイズ 右パーン ゆっくり	S.E. 生音 (かすか ミ……ニ)
	シリシリかたまる たす VP.	S.E. シリシリシリ (たまにニ)
	おちたその瞬間 ストップ モーション!	静寂....

信濃の花火

清水いく子

私は、学生時代のある時期を、善光寺の門前町である長野で過した。その中で、二つの花火見物の思い出がある。ひとつは妻科神社の秋祭の「森花火」であり、他のひとつは地付山で行なわれた夷講の打上花火である。

その後上京してから、私の住んでいた南県町から十分足らずの裾花川の淵にある北上玩具店で、日本でも数少ない線香花火の製造が行なわれていたことを知った。線香花火は、この玩具店から、杏で有名な更埴地方に下請けに出され、紙縫によられている。又、花火師で初めて黥六等に叙せられた青木儀作さんも、森と並ぶ杏の里、安茂里の方という。信濃は、花火の製造、そして花火をすることの盛んな場所であることは、あまり知られていない事実である。

唯一つ、こういう記憶だけが私には妙にはつきりと残っている。——或る晩、母が私を背中におぶって、土手の上に出た。そこには人々が集って、空を眺めていた。母が言った。「ほら、花火だよ、綺麗だねえ……」みんなの眺めている空の一角に、ときどき目のさめるような美しい光が蜘蛛手にはあつと弾けては、又ばあつと消えてゆくのを見ながら、私はわけも分からずに母の腕のなかで小躍りしていた。……注(1)

これは、堀辰雄の幼年時代の一番最初の記憶である。子どもの頃、縁先でした線香花火や、納涼打上花火のことを、「単なる懐かしい思い出」として以上に「自分の人生の本質のような」原体験として、心のどこかに持っている人は多いと思う。花火は、子ども時代の原体験として誰にでも共有されながら、一瞬の揺らめきである美しさ、輝しさとは反対に、すぐに消え暗闇に捨て去られてしまいう運命にあった。このように一時の華やかさを秘めつつも、常に人間の生活の脇役であり続けて来た花火については、あまり記された物もない。しかし主役にはなり得なかった故に、花火には人々に顧られることのなかった数多くの物語が秘められているのではないか。そんな、もう闇の中に忘れ去られようとしている花火の一面を「信濃の花火」を考えることによって、少しでも

も明らかにできたらと思う。

——江戸での花火の発達——

日本への花火の伝播は、戦国時代の天正年間（一五七三―一五九二）で鉄砲伝来とともに南蛮より伝来した。慶長十八年（一六一三）夏、徳川家康が、唐人の打上げ花火を駿府城で見物した記録が、駿府政事録に見られるという。

その後、泰平の江戸時代の中で、花火は軍事用を離れ、町人の遊楽として発達し、慶長年間から、三十年余を過ぎた慶安元年（一六四八）には、花火の作り売りや、町中での花火揚げ禁止の触書が出る程の流行ぶりであった。

——「川中島の戦い」の残したもの——

さて、江戸でこのように盛んになった花火は、四方を山で囲まれた信濃にはどのように伝わっていったのであろうか。信濃では戦国時代に「川中島の戦い」が行なわれた。天文年間に日本に伝来した火薬は、戦国大名である武田信玄、上杉謙信にも逸速く伝わったに違いない。戦国史中の花と言われる永禄四年秋の川中島の戦いの中にも、狼煙は重要な役割を果たしている。旧暦八月十六日謙信の率いる越軍が、千曲川の対岸妻女山に陣を構えた。その

警報は、紅葉に彩られた信濃の山々の頂に設けられた狼煙により、急遽甲府に伝えられ、信玄は出陣する。二十日余りも妻女山に滞陣した越軍は、九月十日の暁に秘かに「雨宮の渡し」を越え、信玄が十二段の陣を構えている背後に出る。頼山陽により、「鞭声粛々、夜河を渡る……」と歌われた八幡原の戦いとなる。

この川中島の戦いは、互角の両軍が三週間も対峙し、死力を尽して闘ったにも拘らず、結果は引き分けて終わった。両軍とも過半の死傷者を出した中で、実際面では全く獲る所がなかった。斯くして織田勢の世となったが、この戦いは後の世まで人々の心の中に多くのものを残し語り続けられた。この点では、川中島の戦いは暗い戦国の世に、美しく輝いて散ったひと筋の花火のような気がする。

今日の花火製産地は、川中島の戦いの戦場となった北信の地と重なる。そして花火を職業としている人の祖先の中には、秋祭の若衆として村に古くから伝わる花火製作の秘法から、自分の一生の仕事にまで高めた人もいる。この戦いには、土着の人が数多く借り出されていたことを思うと、軍事用の狼煙が花火になんらかの影響を及ぼしていることは当然と思われる。

— 花火の道、三州街道 —

さて、川中島の戦いの狼煙からの道とは別の、もうひとつの信濃への花火の道が考えられる。それは、徳川家康の誕生の地、三河の岡崎から三州街道を経て、飯田へ伝わり松本を経て、北信へ伝わる経路である。

飯田藩の古文書（近世郷土年表に所収）によると、江戸の市村と二十〜三十年ずれる丈で、次のような花火の記録が見られる。

（注・旧暦、太陽暦では二か月ずれる）

- 寛文十年七月（一六七〇） 人家附近にて花火を出すを禁ず
- 正徳二年八月十日（一七二二） 郊戸神社祭礼にて初て花火を揚る

○文化十一年八月十四日（一八一四） 今宮花火祭礼の夜、松一芳兵衛傷を受け田町吉右衛門、半兵衛、仁兵衛、大藏、久藏五人を相手取り訴へ後、扱金廿兩に依り示談となる。

○天保十四年八月二十二日（一八四三） 村々鎮守祭礼に付無届にて花火打上の向きありしも以来は必ず其品数届出づ可く触、但、打上狼煙、大流星は前通り停止

三河より飯田藩に伝わって来た花火は、郊戸神社の秋祭に初めて行なわれて以来、事故が多く、停止の命が出ているにも拘ら

ず、鎮守秋祭の景物として村々に広がっていた。

— 妻科神社の「森花火」 —

明治に入って、更埴、長野の村々では、秋祭に花火が行なわれていた。更埴郡では明治二十年頃、花火は秋祭の呼び物であった。庭花火、仕掛け花火に工夫を凝らし、生萱村、その隣村の倉科村、森村等が技術を競っていた。

長野の妻科神社の「森花火」も明治中頃に始まった。妻科神社は、貞観二年（八六〇）に作られた古い神社で、善光寺名所図会にも描かれているように、由緒ある槻の林に囲まれている。二百十日の大嵐を防ぎ稲の豊作を祈る風祭である九月三十日の夜、森花火が行なわれる。

森花火というのは、神社の森の枝から枝へと綱を渡し、そこに花火が仕掛けられる。宵祭の夜、神楽や神輿が鳥居を潜るのを合図に一斉に火が付けられる。花火は綱から綱へと森じゅうに広がり、それまで暗闇の中にあった境内は、木々のシルエットと花火の明りで槻の木に一瞬花が咲いたようである。

大正十年前後が一番盛んだったと言われ、村の青年達が寄り集まって花火を作り、取り付けていたが、次第に規則が喧しくなり、今では、殆んど煙火師がやるようになった。

——二尺玉の祖、高野一道——

更埴市生萱村^{いんがや}の高野一道（一八三三—一九二二）は、蘭法医で順庵と号し、彼の仁術に浴した者は多かった。彼は余技として煙火打ち上げの技を研究し苦心の末、二尺玉を作った祖である。

『雨宮県村誌』には次のように書かれている。

一道は、三河国岡崎の旅廻りの花火師を彼の家に寄食させ、製法を学ぶとともに研究をした。そして半年の苦心の末、正味一尺八寸の大玉を製造した。当時の筒は、鉄製でなく松の木で筒に仕上げ、長さ一丈、底の直径五尺、筒口の直径二尺（「二尺玉」と呼ばれる所以）、これに竹の箍^{たが}を隙間なく掛けたものであった。

明治二十四年、一道は尺八寸の二尺玉二箇を造り、秋祭の晩に始めて打ち上げるようになった。その評判は大したもので、近郷近在はもとより、長野、上田、遠くは三河、名古屋などから見物に来た者もあり、生萱の田は多くの群衆で埋ったという。しかし、これは失敗に終る。

明治三十三年まで、村の小学校は雨宮の来迎庵という廃寺を使用していた。この年十月、校舎が唐崎に新築され、運動場もない障子の学校から、広い校庭に建ったガラス戸の洋風の校舎に移った。村の理事者は、何か催しをして、この喜びを記念したい意向

であった。協議の末、開校式には二尺玉の打ち上げをし、祝意を表わすことに決定し、一道を訪れ依頼した。そして一道は、これを全国に先駆けて見事に成し遂げたのである。

——初冬の風物詩——恵比寿講の花火——

二尺玉の成功した明治三十三年には、花火においてもうひとつの画期的なことが行なわれた。長野の初冬の風物詩となっている、夷講の仕掛け花火が、西之門町の鷺沢平六さんの後援で、初めて柳町の高土手から打ち上げられたことである。県下に二十三軒あった煙火師が全員参加し華やかに行なわれた。

夷講の十一月二十日は、当時一月の初売りと並ぶ年に二度の大売出しで、長野の町は、収穫を終えた近在の田舎からの買物客で、その賑わいは大変なものだった。これからやって来る厳しい冬に備えて、人々は、足袋や手袋、外套等を買いに街に出る。

今日でも、長野の人達は、花火の始まる時間になると、二階の見晴しの良い部屋に炬燵を囲んで集まる。漬たての野沢菜や、ひんやりと冷たい熟柿^{じゆし}を食べながら、一晩を花火見物で楽しむのである。その頃は、初雪の舞うことも多く、昨年の花火は、薄っすらと粉雪の積った千曲川の川原で打ち上げられたという。花火の番付が、大門の金華堂で夷講の間際になると売り出される。番付を

求めて来て、次はどんな花火が上るのかと想像しながら見たりするのを楽しみのひとつである。

現在では長野の夷講は、青木、藤原煙火店の二軒で行なっているが、ここ数年、新しく開発されたスターマイン等素晴らしい花火が上っているという。鷲沢さんの死後、商工会議所が首頭を取るようになり、戦争で中止された昭和十七・二十三年を除き、毎年行なわれ昨年で七十二回も続いている。

打上げ場所も、最初の柳町の高土手から、住宅地の拡大により、安茂里の水道山、丹波島の橋の下、地付山等と移動し、今日では千曲川の河川敷で上げている。

——客神、恵比寿——

ここで夷講について、民俗学的立場から考えてみたい。夷は、福神として広く信仰されている神のひとつである。穏和な神像が一般的であるが、荒夷と称し、祟り神とも言われ、信仰形態も複雑である。しかし、夷の語が外国人を意味するのからもわかる通り、本来は遠い異郷より寄り来て、幸をもたらす寄神、客神であつたことは明確である。信濃の夷神は、百姓夷と商人夷とが土地柄、うまく結び付いた。

信濃では、作神、田の神を夷と呼ぶ所が多い。囲炉裏のある部

屋に、夷を祭る神棚が設けられる。そこに、橋板の三枚目を用いて彫った、狩衣、指貫、風折烏帽子を付け、脇に鯛を抱いた福々しい木像が祭られている。正月三日には、太くて鯛の形をした福縄を張る。田植終いの早苗鑿きなぶりには、稲苗をあげ、稲刈の初めに新稲穂を穂掛して豊作を感謝する。そして十一月二十日の夷講には、夷神が出雲の大社から出稼を終え帰ったと言って、鯛、蕎麦、とろろ、小豆飯に加え、豊穰、瑞祥を表す二股大根や、夷のように福々しいおやきを供え祝う。

商家にとっては、夷は、福利を招来し市場を保護する商いの神である。折口②、和歌森③によると、市は、もとは冬に立ったもので、市日が山の神祭であつた。本来、市という言葉は「斎いく」より来たのであり、その神を祭る場所が市であつた。市神は、市姫という山の神女であり、商売繁昌を祈念した。この市神が、何時からか夷神に替つて来たのである。

市神としての夷神の記録は古く、東大寺(一一六三)、鎌倉鶴ヶ岡八幡(一二五四)、大和竜田新宮(一二四五)の境内に夷神を奉祀した記録がある。中世の商業の発達に伴い、西宮の夷社が栄えた。近世には、夷講という商人の祭祀団体として一般化した。関西では夷講の日を「誓文払い」といい、一年中で商売の駆引きに嘘をついた罪を払い神罰を免れることを乞う。呉服店では、切れ

端の小布を福箱に入れ、早朝から夷切^{えびすぎれ}と言って売り出す。

中世から善光寺の門前町として栄えた長野においても夷講が盛んに行なわれるようになったのは当然のことと言えよう。信濃の商家では、家にあるだけのお金を夷の神棚にあげ、この日にお金を出さないでいると、一年中お金に困ることがないと言われ、出すことは塵芥を掃き出すことでも憚る。親類、出入の者を招いて祝い、商売繁昌を願う。

ではなぜ夷講に花火をするのであろうか。前述のように夷は、遠くから寄り来る客神である。山国信濃では夷は天から山の頂に降臨すると考えられていた。その天降り著く場所を知らせる為の合図の火祭の変形として花火を打ち上げるようになったのではないか。折口は、「日本では、秋、冬の区別が明瞭でない。十月十一月十二月の行事は、結局同じ行事の繰返しである。……冬祭は、田舎では御火焼き山の講を中心としている」^{注(4)}と述べている。信濃において、十月十一月に各地で行なわれた、風祭、松明祭、夷講等の宵祭に、遅くまで大火を焚いたり、大松明に火を付け、転がし投げて練り歩く行事が見られる。

この火祭の客神への合図の火が、火よりも高く上り、明るく輝く花火に移行していったのではないか。市神の祭とも結びついて、商人の後援を得、花火は売り出しの宣伝とも重なり一尽盛ん

になっていたのである。

妻科神社の森花火も、田の神が天降り著く喬木を知らせる為とも考えられる。又、野尻湖、諏訪湖、浪鶴湖で盆に行われている花火も、黄泉の国から降り来る霊の目標としての、どんどん火や高燈籠の火の変形であろう。

今回調査をしてゆく中で、多くの煙火師が火薬の事故で死傷していることを知った。大傷をしても、肉親を失っても、一度花火の魔術に憑かれてしまった人にとっては、花火は命をかけるに足るものらしい。

何日にかけて作っても、一瞬の輝きで消えてしまう花火に、煙火師の賭けた夢は何だったであらうか。又、その花火見物を愛し続けた信濃の人々の心は何だったのであろうか。戦国時代の幕明けとしての狼煙、新しい教育開始の喜びを告げる高野一道の二尺玉、神が天から降り、古い魂が復活する為の秋祭や夷講の花火等、信濃の花火は、汚れた古い時が終り、新しい時の始る先駆けであったのかもしれない。

(お茶の水女子大学)

注(1) 堀辰雄著『幼年時代』新潮文庫

(2) 折口信夫全集第二巻 中央公論社

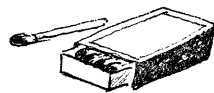
(3) 和歌森太郎著『神ごとの中の日本人』弘文堂

(4) 折口信夫全集第十五巻 中央公論社

線香花火

今からもう十年余り前のことになる。その夏、私は野沢温泉近くの学生村に滞在した。ある日、民宿近くのなんでも屋さんの前を通りしなに何気なく店内をみると、幾束かの線香花火が無難作に並べてあった。その晩、夕食が済むと友人と私は、買ったばかりの線香花火とマッチを持って外へ出た。夜の暗さは街とは比較にならないから、どこででもできそうな気がした。ところが普段夜を心細くさせている農家や民宿の窓の明りと街灯の裸電球の灯は、どれも思いのほか明るかった。明りの届かないところは畑中へ出てしまい、今度は風通しが良すぎた。結局、私たちは農家の納屋の陰に身を寄せ、他からの風は身体で遮るようにして、屈みこんだ姿勢で花火大会を始めた。時折風が廻り込んできて、マッチの火を消した。ライターを使うと、線香花火に慣れた眼には眩しすぎた。それでも子どものとき以来の線香花火は楽しく、美し

田中三保子



かった。だがこのささやかな催しも長く続けることはできなかった。蚊の大群が襲ってきたのである。初めは花火の魅力の方が強く、我慢していたのだが、そのうちどうにもたまらなくなつて宿まで走つて帰つた。明るいところで見ると手も足もまっかで、引掻いた跡に痒み止めの薬がヒリヒリと沁みた。

一昨年、長野県の穂高町にある知人の別荘を貸してもらつて、ほぼ一夏をそこで過した。別荘地は赤松と雑木の山林を少し開いて道を付けただけのところで、建物は丁度その中程に建てられていた。建物近くまで周囲の木々が迫っているために日中でも仲々陽はささず、夜などはベランダから首を出しても空模様を判別することができなかった。「星くずが降るような空」を眺めたいときは、道まで出て、なお空がなるべく切り取られていない場所を探さねばならなかった。かくてこの別荘のベランダはかっこうの

花火大会会場であった。ベランダに立つとどこにも灯はみえないし、月明りさえ届かなかった。たまたま火が消えたりすれば、文字通り鼻をつままれてもわからぬ闇となった。私たちはこのベランダで心ゆくまで花火を楽しんだ。

東京から友だちが訪ねてきたときも、早速花火大会を催した。私たちが東京から持参してきた花火のなかで、彼女は線香花火にとても感激してくれた。聞けば線香花火は初めてとのことであった。一度帰京した彼女は、大量の「線香花火」をおみやげに再訪した。それは今までみたことのないものであったが、構造的には普通の線香花火と類似していた。ただ火薬の部分はこよりもずっと長く、金色の細い紙が斜めに巻きつけあって、きらびやかな装いをしていた。その晩、私たちはわくわくしながら、花火を試みた。火をつけると黄色い炎が景気よく燃え昇った。玉が落ちないようにと予めこより下の方を押えていたため、思いがけない火の勢いに思わず手を放してしまった。二本目はずっと上部を持ってみたが、火を噴き出し終るとそのまま燃え尽きたようだった。それでもいつ火花がとび出すかと、息をひそめて暫く燃えさしを見守っていた。要するにこのときまで、私たちは全員、この火花が新式の、あるいは洋風の線香花火であることを疑わなかったのである。彼女は自分でもとても落胆し、私たちに盛んにすまな

った。店のおばさんに念を押したのというのが彼女の話だった。暫くして、私たちは火薬を巻いている紙の色と、噴き出す炎の色が同じであることを発見した。こよりの方はいえ、線香花火のときに向けられた注意深さは反対に、振り回すために用いられたのは皮肉であった。

金田一春彦さんは、上と下のことを逆にしても意味が変わらない数少ない例として、線香花火をあげておられた（「ことばの歳時記」）。この話を初めて読んだとき、花火線香という言い方を聞いたことがなかった私は、それでは火のついた方を上に向けて持たねばならず、不自然だと思った。先日、編集者の方から取材旅行のおみやげに花火をいただいた（花火の魅力に負けたおかげで、この原稿を書くはめになった）。その中に、「関西の線香花火」という注釈付きの花火があった。十数センチのごく細い竹ひごの先に黒い火薬がむき出しのまま固められているだけのものだった。形に見覚えがあったが、燃え方は、どんな風だったか記憶がなかった。改めてやってみると、形の違いにもかかわらず普通の線香花火と同じ燃え方をした。しかし、火玉がくっついている竹も燃え進んでいくので、火花をとばさないうちにほとんど落ちてしまった。よくみると、袋の端に、斜め上にして火をつけること、風が少しあるところでは火花がよく出ることなどが書かれて

あった。その通りになると、確かに火玉は竹の端にぶらさがったままで、息を少し吹きかけると火花は威勢よく飛び交った。それはさておき、私は線香火花にも東西があることを知ると同時に、なるほど、これは火花線香だとひとり納得した。

ちがう線香火花をみるとつい買ってしまうのだが、実際に一夏でやり終えることはなかった。だから種類の異なる線香火花が年々たまることになった。初めの頃、線香火花が仲々手に入らないせいもあって、残りはビニール袋に乾燥剤とともに入れ、大切に保存していた。しかし、段々ずぼらになってきて、ただ本棚の隅などに置きっ放しの状態が多くなった。夏になるとそれらは寄せ集められた。ずさんな管理をちょびり後悔しながら火をつけるのだが、不思議にいつも鮮やかな火花をとばしてくれる。減多なことでは湿らないものらしい。

多くの線香火花をやってみると気づくことだが、線香火花にも随分違いがある。炎が上に昇っていき、まっかな丸い玉になるまでの様子、玉から松葉模様（この形容は歌謡曲で知ったのだが、ひばの葉の方が近いのではないかと私は思っている）が飛び散るまでの時間、松葉の大きさと飛ぶ距離など少しずつ異なる。火薬部分の大きいものは総じて火花も大きいのだが、玉が落ちるまでの時間は必ずしも火薬量に比例しない。同じ束の内の個体差より

も種類の差の方が明らかに大きいようで、玉の落ち易いものは、あれこれ持ち方を工夫してみても、風向きを考え、息をこらしてみても、落ちてしまう。火玉の命は製作所の腕に依っているのである。期待をこめた小さな火の玉が、発火しないうちに、もしくは宴半ばに火花をとばしながら闇に落ちていく瞬間は、何ともやるせないものである。ひとはそこに人生のある一面をみたりする。

最近、日本の古いものが若い人の間に人気があるようで、バラ売りの線香火花を目にすることも多くなったように思う。昨年の夏、同じ店で値段が倍違う二種類の線香火花を見つけた。どこが違うのかという好奇心もあって買ってみた。高い方は火薬の部分も大きくて、彩色も鮮やかで、やってみるととびだす火花の模様は大きく立派で、時間も長かった。もう一方はというと、形が小ぶりであるというだけではなくて、彩色の部分も思い切り少なかった。そして何よりもそれが出す火花は貧弱で、弱々しかった。こんなにも差のある線香火花が同じ店に並んで売られていた、そのことを考えているうち、私は段々腹が立ってきた。線香火花にまで格差をつけることに一体どんな益があるというのだろうか。一緒に並べられた安い線香火花があまりにわびしく、貧相にみえて、悲しかった。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

経 験 — その三 — (最終回)

村 田 修 子

書かれたものを読んで、そこからずばりと貴重なものを得る種類のものとは違って、読んだあととそれぞれが問題を持つて考えることをねらえば、ということでお引受けて一年たちました。最後ですから、今度は私がこの世界にいたからこそ経験できた珍しい部類に属することを書いてみようと思います。

改めて数えたことはありませんが、私のふれた多くの子どもたちはみな違います。その人数が多くても名前を聞くと、それぞれの子どものしたこと、着ていた洋服の色など、何かは思い出すものです。ですからまして個性が強すぎて扱うのがむずかしくて苦労した子、とっぴな行動をした子どもについては、いつになっても忘れることはできません。ですからそのときは教師も親も困ったり肩身の狭い思いをしたかも知れませんが、あとになって大局的にみれば、

「そうだったからこそよく覚えていられたのだ」と平凡でないことの有難味もひとしお、といえるかもしれません。

大分前のことですが、個性の強い男の子が多い組がありました。「このひとたちはなに年生れなのかしら」なんて考えてしまいうくらいとてつもないことをやりました。三歳のときにしたことを拾ってみますと、

。誰のお弁当でもかまわず、ついである自分のお湯をかけてしまう。

。お弁当置くところに数人で行って、誰かれの区別なくバスケットからお箸を出して集めてしまう。

。水槽の中に手を入れて金魚をつかんでポケットに入れてしまう。桜の木から落ちてきた毛虫もポケットに集めて家に持って帰るという。

。小さい積木をポケットに入れてみんなでへやから出ていく

のについて行ってみると、お便所の穴の中につめている。など目が離せない毎日でした。

三学期になった頃、その中の二人はお兄さんになりました。すると前に輪をかけてひどいやきもちの状態になり、既に卒業していた母親と別れる朝のひとつも、私は眼鏡をとばされないように準備してから受取るという有様でした。

その一人は普段余り口をきかず黙っていて、結果的にはみんながあつというようなことをやるので、友だちは幼いながら、その男の子を変っている子、と思っているようでした。

遂に母親が大学の専門の先生に相談に行きました。その結果、「今迄の様子からして環境を全然変えるのも一つの方法なので、自分の家で預かることができれば是非そうして上げたいが、考えると家族構成がうまくないので効果が無いと思うので……」ということだったので、その条件を伺ってみました。

。この趣旨を理解してくれる親であること

。子どものことに余り手を掛けることをせず、どちらかというときさっぱりした扱いができること

。その家庭の全員がこれについて了解して協力してくれること

。兄弟がある場合は、好ましい年齢関係であること

一人の子どもの預かる、ということとはそう簡単にできることではありませんし、その上前にあげた様な条件をそなえた家を探すことは至難なことですから私は余り期待をしませんでした。

ところが、普段から仲よくしていた同級の女の子の母親が預ってもよい、ということになり、しかもその女の子の兄が二歳年上であることも好都合の条件なので、両方の家で話し合った上いよいよ実行することになりました。

期間は一月ということ、男の子はトランタに衣類を一式つめて行ったそうです。行くことについては親がどういったのかは聞きがしましたが、別に嫌がらなかったようでした。

その家から兄は小学校へ、その妹と男の子は同じお弁当を持って幼稚園へきました。園ではその女の子とは特に遊ぶわけではなく、最初の頃は前と同じようでした。ただ家に帰ると今迄のように何でもいう通りになっていたのに、今度の家には二歳年上の男の子がいて、その子の言動が力を持っていたし、女の子がとてもしっかり者だったので、衣類の脱着などもさっさと済ませてしまいますしその母親も手伝うなど

の一切特別な様子はしないので、男の子もやらざるを得ない、ということになって、半月位たつとなにか変ってきたような感じがしてきました。

私は一つの試みとして、その子をみんなの前に立たせてみようと思いました。そこで帰りの皆が椅子に掛けたとき「昨日何して遊んだか聞かせてね」といって、その男の子の二人前の人から順番に前に出てきてもらって話を聞きました。

いよいよその男の子の番になりました。今迄そういうことなどしたことがなかったので、私もどきどきしてどうなることかと思っていました。他の子どもたちの中からは「やらないんじゃない」などの声も聞かれました。そばに行つて「あなたの番なのよ」と言いますと、こくりとうなずくのです。何につけてもぐずぐずするので、これから先どうもっていいか、と思ひながら、「じゃ、みんな目をつぶっているから、その間にここまでいらっしゃいね」と私がいうと皆は本当に一せいに目をつぶりました。そのときの皆の顔が真剣だったのには驚きましたし、感動しました。

それでも大分長いときがたちました。目をつむったままもう一度うながすと、ドサリ、と大きな音がして、男の子は椅子から床に落ちてはいつくばりました。「早くいらっしゃい」

とその様子を薄目で見た私のうながしに感じてその子は床をそろそろとはって長いことかかり皆の前に立ちました。

私はしっかりとつかまえてやって、それからは驚きや感激を押し殺して極く普通のことにように「何したの」と聞きました。ぼそぼそと話し終ったとき、友だちは皆一せいに拍手をしました。それ以後その子は改まったときにも次第に大きな声で話をするようになりましたし、顔の様子も円満な感じを受けました。

一か月位たつてからその子は「もう家に帰ろうかな」と言つたので帰ることにした、と母親から報告を受けました。

勿論その他人の中で過したことで全部が全部解決したわけではありません。小学生になってからもいろいろなことがあつたようですが、常にクラスの子どもたちがその子に協力してやっていたということです。

私としてはその子の事以外に予想していなかったほかの子が長いこと静かに目をつむり期待の心をもって協力してくれたことや、できたとき拍手をしたたえてくれたことは忘れることができない経験でしたし、改めて幼児に対する期待は性急にしないで「待つ心」が大切なのだという貴重な体験をしたのです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

永瀬義郎先生のこと

赤間 峰子

本誌第七十五巻、第七十六巻の表紙を、夢にあふれた版画で飾って下さった永瀬義郎先生は、三月八日に八十七歳でおなくなりになりました。そのことを報じた新聞には「告別式は行なわず、四月二十八日から開かれる予定だった個展の初日に「永瀬義郎を偲ぶ会」を催します」とあって、それがいかにも先生らしく、今さらのように生前の先生をおなつかしく思いました。といっても私が先生を知ったのは一昨々年、小田急百貨店で開かれた「永瀬義郎のすべて展」が初めてでした。直接お目にかかったのもその時と、あと一回お宅におじゃました時だけなのです。それでも、先生と奥様とお二人のお心づくしでしょうか、展覧会のお誘いはもちろん、季節ごとにも美しい版画の絵葉書に一筆そえられたものをいただくました。そして先生は、最初の時は赤と白の大柄の模様のアロハシャツ、次には真赤なセーターをお召しになつて、それがまた、とてもよくお似合ひでした。

そもそも私は、初めて先生の画を拝見した時からすっかりとりこになってしまったのです。そしてこんなにかわいらしく美しい画をおかきになる方は、きっと子どもの心をいつまでももっていらっしゃる方に違いないと思ひ、どうしても表紙にいただきたいと思ひつめました。「有名な方だからとても……」としり込みしていらした河合編集長に無理にお願いして、ともかくお宅へ行つていただきました。ところが実にあっさりと受けて下さったとうかがひ、私はまたまた先生のファンになつてしまったというわけです。

この、先生を偲ぶ会に出席して、やはり私と同じような（多分）女性、が実に多いのにびっくりしました。「会費は男性五千元、女性三千元、お子さまはご自由にお連れ下さい。当日は平服でお越し下さい。ご出席の方には記念として作品一点をさし上げます」と至れりつくせりのご案内をいただいで、追悼会にはちょっとふさわしからぬ、うきうきした気分

で出かけました。少々定刻におくれたせいか、会場は人いきれと煙草の煙でいっぱい、御馳走などはほとんどのお皿が空っぽという陽気な会でした。発起人の松永伍一さんのごあいさつにつづいて水上勉さん、大竹しのぶさん、そのほか先生にゆかりの方たちが写真の先生にむかって話されました。いつまでも若さをたもっていらした先生の秘けつは「過去をふり返らずに、今日から明日のことを考えること」とおっしゃったとの水上さんのお話は印象的でした。宮城まり子さんは「私は今、先生が面倒を見て下さったねむの木の子どもたちの画の展覧会で札幌にきています。だから行かれないのです。でも先生はきつと、いらした方たちに「よく来たね」とにこにこしておっしゃるでしょう」とメッセージを寄せられました。そして大竹しのぶさんはテレビで見る清純な感じそのままに、一生けん命先生によびかけられました。「去年同じ病氣（直腸がん）で父をなくした私は……」と声をつまらせて奥様をねぎらわれ、場内もしんとなりました。でもそのあと先生のお好きだった歌、星は何でも知っている、雪の降るまちを、この道、四季の歌を全員で合唱してまた会はもり上りました。河合編集長のすばらしいテノールに押され気味

ながら、私も久々に声をはり上げて歌いました。

このあと思いがけず松永伍一さんにもごあいさつができて、以前ご執筆をいただいたお礼を申し上げることもできました。何か永瀬先生のおひきあわせのような気がしますが、今夜の出席者は当初二五〇名の予定が六百名になって大分発起人の方々はご心配だったとうかがいました。

一同帰りぎわに先生の作品を一点ずついただいて奥さまと一粒種の薫さんにごあいさつをして失礼しました。薫さんは今年日大芸術学部を卒業されましたが、もう昨年先生とお二人で「親子展」をなさるなど、立派にあとをついでいらっしやいます。

画にそえられた先生のお言葉はそのまま、先生ご自身を現わしているといえましょう。

清貧に甘んじなければ

いい作品は生れない

と言っても貧乏すると

卑屈になり、作品まで濁って来る。

ノーブルな精神こそ

優れた作品の母体となる。

永瀬 義郎

高崎能樹先生の生涯と

その教育活動（その二）

小林 公一

先月号に標題で（その一）を書きましたが、今月号はその続きです。すなわち、高崎能樹先生が残された多くの著作の中から手に入った主なものを年代順に追ってゆくこととします。

二、教育活動（続き）

「ヤコブ・エサウ」（一九三六年二月、基督教出版社）これは、基督教文庫『聖書物語』全二四巻中の第三巻として、高崎能樹先生がヤコブとエサウを分担して執筆されたものです。

童話集『鈴蘭の花』（一九四七年六月、子供の教養社）これには、「三つの人形」等二八の童話が収録されています。

高崎式基本算数用具『数図さいころの使い方』（幼稚園より小学校低学年まで）——（一九四九年九月、日本工芸社）

この書物には、新しい算数教育、幼児の算数教育の原理、基本的な予備誘導、実際の誘導法——五までの数の取扱ひ方、

十までの数の取扱ひ方、十以上の数の取扱ひ方等——についてユニークな考え方が展開しています。その中で、幼児の数意識の発達は、直観物が身近に在ることと、それを取扱う「経験回数」が多いことによって著しくなることを立証しています、と説かれています。

算数の心理として、

(一)よく見る——よく考える——よく理解する——推理判断の推考力で理解を裏づける——更に想像力をも伸ばして興味づけること。(二)幼児は感覚的でありますから直観方便物の取扱ひ方に重点を置くこと。(イ)数図・絵・現物その他……視覚型 (ロ)拍手・足や口の音・その他……聴覚型 (ハ)持ち運ぶ品物・その他……筋覚型 (ニ)幼児は経験的であって論理的でありませんから、日々の生活と遊びの中に算数生活の経験を豊富にさせること。といったようなことが述べられています。「金銭教育の仕方」にも触れています。良心的な算数生活を奨めるために、積

極的に金銭教育をせよと主張し、五歳からがその好期であるとされています。

『母心による教育』（一九五二年四月、草美社）

この書物は二百余頁の中に三八項述べられています。それぞれ傾聴に値する言葉が説得力をもって語られています。特に気付いたことを記しますと、先ず、女性は単に生理的な女性としてあるのではなく、母性の意識に立つものであり、神の代行者である使命を全うすべきであることが強調されています。

「女性より母性へ」「永遠の母」「神の代行者としての母」「母親の感化力」などの項がこれです。また「子どもの品性教育」を説き、「情操教育の効果」に触れ、情操教育は即ち宗教教育であるとして情操教育の大切なことを強調しています。「信仰教育の力」の項では、一五歳の中学二年生の男子——日曜学校の生徒——の実例が記され、腹膜炎の病苦に耐え、牧師から死の宣告をされたにも拘わらず心を騒がさず、臨終の床で、親、兄弟、親戚、知人、病院長、看護婦、女中にまで一人一人に謝辞を述べ、日曜学校の友達によろしくと言って、従容として瞑目したことが記されています。もって、信仰教育——特に回心期にある人間のそれ——が如何に大切であるかが述べられています。

『基督教幼稚園の在り方』——両親と先生方に語る——（二）

（四）

これは、一九五三年頃のものと思われる。

この中で、人間の生命は「体生」「情生」「知生」「理生」「徳生」「美生」と「靈生」の七つに分析されるとし、人間の教育目的はこの七つの生命を充実させることにあります。すなわち、(1)からだを丈夫にさせる。(2)感情をうるわしくさせる。(3)豊富な知識をもたせる。(4)合理的生活になじませる。(5)倫理道徳を全うさせる。(6)高い文化を身につけてやる。(7)神と交る生活を徹底させるの七つです。

「教育基本法」には、人格の完成を目ざす教育とか、平和国家の建設に貢献し得る人物の養成とかが日本の教育目的であると示されているが、それが「文化教育」だけで出来ると考えたら大間違いで、宗教を無視した人本主義の文化教育では絶対に出来ません。それは「神本主義の教育」によるべきものであるとし、基督教主義の幼稚園は「靈育を本位」とすべきであると主張し、「神なき教育は知慧ある悪魔をつくる」といったオスカー・ワイルドの言を引用しています。

フレーベルは、人間教育の目的について、「我と周囲との関係交渉を通して、神と我との関係交渉を知らしめ、神と和ぐ生

活を営ましめるのが人間教育の目的である」と言っています
が、これこそ永遠不変の真理であるとしています。基督教幼稚園が何故フレーベル主義を尊敬するかというと、それは、人間教育の目的が有神論の根拠の上に立っているからであり、その崇拜対象が「完全な人格の実在の神」であるからであるとしています。

フレーベルは文化教育、道德教育、科学教育また健康教育を尊重しています。けれどもそれ等はすべて、目的ではなく、手段であって、窮極の目的は「神と和ぐ生活」に在りとしています。私共はこうした点に共感して、基督教幼稚園の在り方と致しますが、この尊い霊育を、三か年の幼稚園生活だけに打ち切らずに、教会学校の教育へと延長させてゆくことが大切であると主張しています。

基督教保育の實際を考へる場合、幼児初期の被暗示性やそれと密接に結合している幼児の模倣性、就中大人のまねに心を致し、親や教師の示範の教育が最も大切であることを痛感いたします、とあります。幼児期の特質である「被暗示性」と「模倣性」と「想像性」とを中心に幼児を宗教的雰囲気の中に安住させ、生々とした宗教情操の芽ばえを育て、キリストに対する愛慕の情を湧き立たせることの必要性を説いています。

幼児の信仰教育を考へる場合、新約聖書エペソ人への手紙六章四節に記されている「父たる者よ。子どもをおこらせないで、主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい」が基督教教育の真髓であり、私共の智慧や感情を本位として子どもをしつけるのでなく、基督の教え給うた教えに従って教えたり、しつけたりすることが基督教教育の本道であります、と主張しています。

基督教幼稚園における保育作業の重点は、礼拝生活の訓練、祈りの生活の訓練、讚美の生活訓練等を通して、神と交わる生活訓練をすることが教師の任務であることを強調しています。

基督教幼稚園における「信仰教育」は、宗教情操の教養を土台として、それを實際的な信仰生活の形態に導きあげてゆくことであるとして、全体の基礎である「宗教情操の涵養」について、次のように述べています。

(1) 畏れの心を養え。これを徹底するためには、指導者が先ず敬虔な態度で神に祈り、神の聖旨に従うことを第一として見せねばなりません。幼児は指導者の宗教感情と宗教的行爲とに倣って、それに同化したします。

(2) 憧れの心を養え。子どもたちはキリストを知ると、「キリストのようになりたい」という憧れのために、その理想我は常

にキリストを見上げます。そしてそれと同時に現実に立ちかえると、不完全きわまる自分がよくわかって、遂に「罪に捕われている自分」を自覚するに至るのであります。このキリストは憧れの的であるばかりでなく、捕われている自分を救い聖めて下さる救い主であることが信じられるのであります。

(3) 感謝の心を養え。感謝の心と「その恩に応える態度」とを神とキリストに向けさせるように誘導することが大切であります。

(4) 信頼の心を養え。神とキリストを信頼し、隣人をも信頼して仲よく協力する。そのためには、両親や先生がその模範を示せばそれで結構であります。

(5) 善意の心を養え。神から万物を見ると呪うべきものは一つもありません。神の支配下にあるようになると、どんなに醜惡に見えるものでも、真となり善となり美となつてしまいます。

特にキリストの福音はどんな罪人をも聖化してしまいます。このキリストの恩恵を信ずると、誰に対しても善意心が持て、祝福心が持てます。幼児に善意心を育てるには、指導者の感化が第一で、何事をも善意に解釈する特徴のある先生であり、父母であればその通りに同化してしまいます。

右のように、「敬虔即ち畏れの心」と「高きを憧れる憧憬心」

と「感謝報恩の心」と「信頼したり信頼されたりする心」と「善意をのみもつ心」とを幼い時から養いますと、神を愛し人を愛する「宗教的な生活態度」は立派に育つのであります。

『総合 保育カリキュラム』——両親と先生のために——（一九五三年四月、草美社）

これはB6版二〇〇頁余りの本で、その内容は、「序文」「カリキュラムと目標」「自発性の原理」「カリキュラム試案」「毎月の保育案」（四月——三月）「健康保育の要訳」「附録・カリキュラム年表」の順に書かれています。

「カリキュラムと目標」の中で、教育基本法を尊重してカリキュラムを作成しなければならないが、自分は「有神論」の上に立つと明言しています。それは、人間教育の原理が、どのような人生観や世界観の上に立っているか——「唯物論か、汎神論か、有神論か」——によって非常な差異が生ずるからであるとしています。

また、「性格教育」すなわち、強く（自律性）、やさしく（社会性）、聖く（宗教性）をしつけて、常識、友情、勇氣、想像、敬虔、ユーモアの豊かな人物にすることを強調しています。

現在では小学校低学年の教育と幼稚園の保育と全く一本筋につながったので、それを考慮に入れ、また、「季節」や「年中

行事」をもその中に入れて保育カリキュラムを作製すること、

また、民主主義的感覚で次第に発展するように作ること、従来の「教師中心主義」の保育が「幼児中心主義」の保育になるように計画して、自発性の原理に立って構成することが今後の保育カリキュラムの目標でなければならないと主張しています。

「カリキュラム試案」には、高崎能樹先生が園長である阿佐ヶ谷幼稚園のそれが記されています。終戦後の子どもの特殊性は、「心身ともに弱められている」ということで、その原因は「劣等感」に捕われているからであり、両親の生活の乱れが影響していることも多分にあるとして、「臨床心理」や「精神衛生」を保育に応用し、特に「宗教情操の教育」に力を入れなければならないことを力説しています。

阿佐ヶ谷幼稚園の保育内容は、次の通りです。

一、個性本位の保育（生来の資質を調査してその長所を發揮させる）

二、健康増進の保育（保健衛生の習慣を身につけてやる）

三、生活向上の保育（左の五目標の達成に努める）

（一） 自律生活（元気で本気に、責任行動の出来る子どもにする）

（二） 社会生活（愛と和をもって、よく人と協力する子ども

にする）

（三） 宗教生活（神を見あげて、高く聖き憧れをもつ子どもにする）

（四） 科学生活（よく見る、よく聞く、よくする―特徴をもつ子どもにする）

（五） 芸術生活（美を感じ、美を表し得るセンスの豊かな子どもにする）

また、阿佐ヶ谷幼稚園は、幼児の保育だけでなく、「P・T・A」「母の学校」「母の会」等を通して、父母の教育に力を尽しています。

「毎月の保育案」は、カリキュラムの目標と保育要項に則って詳しい指導が為されています。

「健康保育の要訣」は、「積極的健康増進法」と「病気の早期発見の秘訣」の二項に分けて記されていますが、前者においては、(1)日光、(2)空気、(3)食物、(4)運動、(5)睡眠、(6)衛生、(7)精神衛生の七つの点について、それぞれ子どもにしつける要点を具体的に指導しています。

附録の「保育カリキュラム年表」は、月次、組（年少組と年長組）、主題、単元、しつけ、国語、社会、理科、音楽、図画工作、保健体育、および備考から成っており、「しつけ」は「強

く「やさしく」「聖く」という観点から記されています。一目瞭然で、大変便利です。

『信・望・愛の教育』（一九五五年二月草美社）

この本には三一項に亘って述べられていますが、その中で特に気付いた点について記してみたいと思います。

「現今の教育の目あて」（一、二）の中では、広く深い常識、勇氣、想像、敬虔およびユーモアをもった人間が望ましいとされ、愛による理解、能動的教育の必要性が説かれています。

「母よ、母たれ」「母心は尊し」「母性を尊重せよ」「母に生くる道」等、母親としての在り方が強調されていますが、「母の教育の秘義」の中で、「懇切に論ぜ」と「同化に注意せよ」が説かれ、「母よ、笑顔であれ」が切に望まれ、笑顔は信仰と希望と愛との表現であるとされています。

『子どもの個性と癖』（一九五六年九月、草美社）

この本は、「個性本位の教育」「気質本位の指導要領」「子どもの癖の直し方」の三部から成っています。

「気質本位の指導要領」においては、多血質的傾向の子ども、胆汁質的傾向の子ども、粘液質的傾向の子ども、神経質的傾向の子どもと分けて、それぞれの特徴を挙げ、その指導法を、遊びによる指導などを織り交ぜて、具体的に懇切な指導がなされ

ています。

「子どもの癖の直し方」の個所には、勉強嫌いの子ども、喧嘩癖の子などもなど一三項に亘って記されています。その中で、「嘘つきの子ども」の中では、男の子どもは主として意志に基づく嘘をつくが、女の子どもは主として感情に基づく嘘をつきます。などと分析され、子どもの嘘は「愛と理解とで矯めよ」と指導しています。

*

*

以上、「その一」「その二」の二回に亘って、高崎能樹先生の生涯とその教育活動を跡づけて参りました。先生はキリスト教の新教（プロテスタンティズム）の牧師として召命を受けましたが、極めてユニークな牧師であったと申せましょう。

その第一は、教育（的）伝道の提唱者としての位置づけです。阿佐ヶ谷幼稚園を開設し、同時に日曜学校を開き、その両者を結びつけ、日曜学校から教会に進み、その中から多くの者が洗礼を受けてキリスト教信徒となりました。教育伝道は成功したと言えると思います。

第二は、キリスト教幼児教育（キリスト教保育）者として活

躍したということです。特に、母親教育に大きな足跡を残しました。すなわち、幼稚園に母の学校を設立して母親を指導し、雑誌『子供の教養』や単行本を通して母親に大きな感化を与えました。母の学校で育てられた母親方が教会と結びつき、受洗して教会員になった方も多くおります。

その人となりは、温顔で、真底子ども好きで、子どもから慕われ、子どもを心から愛しました。幼稚園の教諭にどうしてもなつかない幼児が、園長にはなついた実例もあります。

童話が上手で、その右に出る者は恐らくいなかったらうと述懐される幼稚園の先生もいます。

書き残された著書の紹介もしましたが、広い視野をもって幅広く筆を進めました。この外にも、音楽教育や才能教育にも関心を寄せておりました。

神学的には、先生は自由主義神学の影響を受けていたと申せましょう。それは、先生の受けた神学教育と活躍された時代が、主として自由主義神学が主流をなしていた時代であったからだとも言えましょう。

自由主義神学というのは、シュライエルアッヘルからリツチェル、トレルチ、ハルナックという系列で受け継がれていった神学のことです。これは、ドイツ理想主義（あるいはドイツ観

念論）の影響を多分に受けた神学です。ドイツ理想主義は、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルと受け継がれていった哲学思想で、ヨーロッパの近代を前提として考えた場合、完璧な哲学体系です。それは、ヒューマニズム（人文主義）——人間中心主義——の思想で、プラトン等古代ギリシャ哲学とは、人間観、世界観、神観等において全く相反する対照的な思想です。従って自由主義神学は、キリスト教と人文主義の混淆で、聖書に記されている本来のキリスト教とは異なったものなのです。

現代神学の主流は、弁証法神学といわれるもので、カール・バルト、エミール・ブルンナー、パウル・ティリヒ達がその代表者で、自由主義神学が陥った人文主義的傾向を是正して、宗教改革者の精神に戻し、更に原始キリスト教の精神に還ろうとするものです。これが、聖書的に見てキリスト教本来の神学思想と言えるのです。

高崎能樹先生は、キリスト教教育思想家であったというより、極めて優れたキリスト教教育実践家であったとも言えましょう。教育伝道の提唱者として、また、キリスト教保育者、特に母親教育者として、不滅の足跡を後世に先生は残されたと言えると思います。

子どもの活動と保育空間（その三）

堀井 仁子

スペース保育継続期から定着期へ

赤塚保育園の保母は、保育経験十五年以上の平沢主任をはじめ、五・八年の経験を持つ四人の保母、それに、昭和三十年生れの若い三人の保母たち。保母のチーム・ワークも保育園が平家の小規模な方であるため、すこぶる良い。

若い三人の保母が、赤塚へ配属された時には、すでにスペース保育が始まっており、この二年間で何らかのものを先輩保母から学び、見様見真似で保育を進めている。

実質的に、保育の軸になっている四人の保母もいろいろな経験を持っており、保育を行なう姿勢は同じなのだが、方法が違ふ。

仲間同志の「和」を強調し、一斉保育を中心に保育を進めたい保

母、自由あそびを中心に、子どもの個性をより尊重したいとする保母、いろいろである。共通して、家庭を持っているため、残念ながら、私の望む程には、積極的に動けない。

しかし、主任の平沢保母は、三年間の実践で、子どもの生活に、どのような影響を与えるか？「空間も考えた保育」をどのように生かせば良いか？をもっともまじめに考えてきた。担当してきたクラスの状況を通して次のように話してくれた。

「五十一年度（継続期）はたんぼぼ組（三歳児）の担任と決まっています。まず考えたことは、保育室をどのようにスペース割りしたら、子どもの生活がより良く、保母もより良い保育が進められるかということでした。この一年間のスペース保育（試行期）がこういうことを、考えさせるものになっていたのでしょうか。

1 クラスの半分の子どもが、新入園児であるため、安定した状

態で活動できる“場”が必要であること。

2 進級組・新入組共に、幼児クラスの生活は、始めてなので、保母との関係がうまく作れ、きめ細かい指導ができること。

3 室温・採光等の物理的環境、そして、生活の流れが適切であること。

これら三点を信松保母（複数で担任）と共に、頭において、活動の場を設けようと考えました。

当初、図-9のような配置で、カーベットの敷いてあるごっこあそびのスペースでは、ママゴトやブロックなどで、落ちついてあそんでいました。

ところが、五月の後半になって問題が出てきました。保育園生活に慣れてきた子ども達のがあそびが、活発になるにつれて、一緒に置いてあるオモチャや本をがちやまぜにして使い始めたのです。これもあそびの発展ですが、絵本がお盆や御馳走になり、バラバラに投げ出したりして、その上を歩く有様。本当に読みたい子どもが落ちついて読めない。ブロックでも同じで、そのためのぶつかり合いが多く、あそびそのものが阻害されたのです。

『これは、何とかしなければならぬ。』

活動の場は、子どもの成長に合わせて、同年齢、同年度の中でも変化・適応させていくことが必要なのではないか？

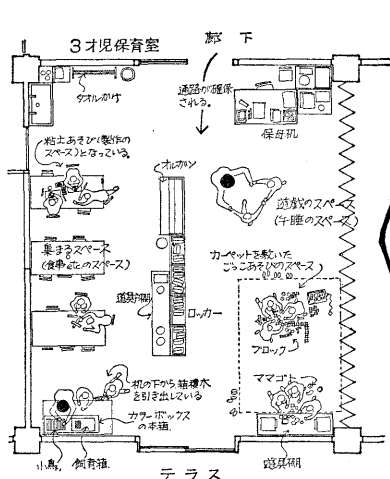


図-10 継続期のスペース保育（変更後）
S51年5月末以降

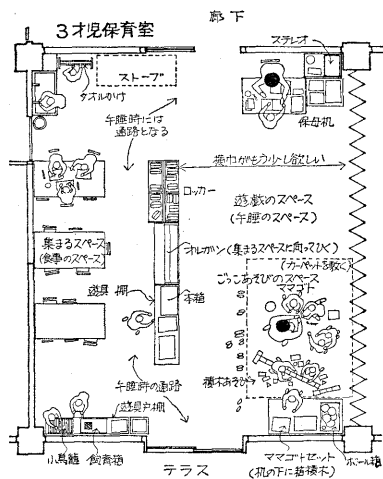


図-9 継続期のスペース保育
S51年4～5月

そんな風に考え、坂本さんに相談して、活動を動的なもの、静的なものに分け、それぞれに対応した活動空間を設けました。

変更後(図-10)の実践を通して、次のような長所と短所が出てきました。まず長所は、

- ① 活動の内容によって、活動空間を分けたので、子ども達の活動が各々十分にできる。
 - ② 子ども達の流れがスムーズになり、食事を終えた子どもが、ごっこあそびのスペースであそぶため、食事を続けている子どものじゃまをすることがなくなった。
 - ③ 机を重ねたり、降したという必要以上の労働が省かれ、それを他の仕事に向けられる。
 - ④ 広い遊戯のスペースに、カーベットを一枚敷いただけで、一角がごっこあそびのスペースとなり、あそびを安定させる。一方、短所は、
 - ⑤ 本箱は、高さは良いが、背暗がりとなり、興味がうすれる。
 - ⑥ 机の下においた箱積木は、ごっこあそびのスペースと離れていて、出し入れに保育がいらないと無理で、自発的活動は少ない。
 - ⑦ ストープ、オルガンの置場所がない。
- 保育室の絶対面積が、限られているため、ストープを出した時

期は、オルガンを南面窓下の机の横に置いて、この年度は、これ以上大きな変化はなく、実践してゆきました。

五十二年度(定着期)になって、再度、三歳児の担当(森田保母と複数担任)となり、前年度の短所を何とかしたいものと、考えなおしてみました。

図-11のように、(a)に対しては、本箱の台にしている遊具棚の使い方・向きを変えることで、解決することができ、同時に、(b)についても、前横が広く空いたことで、子どもでも出し入れが可能となり、多くあそぶようになりました。

けれども、まだストープの位置の問題、そして、オルガンも、

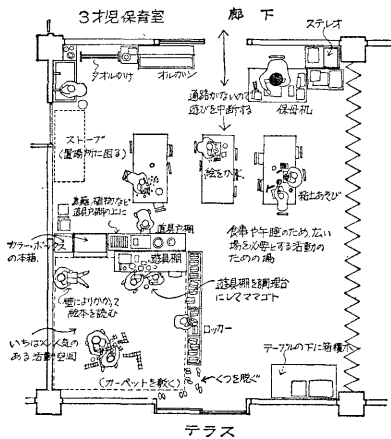


図-11 定着期のスペース保育

活動空間内に置けば、狭くなるという問題が残りました。

『限られた広さの中で、どうやったらいいかしら?』オルガンやロッカーをあちこち動かし、歩いたり、座ったり、ふとんやゴザの寸法を測ったりして、やっと落ちついたのが、現在の形です。

スペース保育を始めた時、正直言って、面倒くさいという気持ちでした。でも、進めて行くうちに、子ども達の生活が違ってきたことが、はつきりとわかってきました。そして、保母も今まで以上に真剣にとり組み観察をする態度が育ってきたのです……」

コーナーとスペースの違いについて

四年間、私は、赤塚保育園で子ども達と生活を共にし、たまたま、坂本さんに出逢い、スペース保育を経験してきました。当初、坂本さんより提示された子ども達の流れ図(図-2、前々号)によって、私達が、いかに何気なく保育室を考えているか、またただ家具の位置を変えるだけで、子ども達の流れがスムーズになることを思い知らされました。そして、この時、「コーナーとスペースの違い」について、説明を聞いたが、さっぱり理解できず、はじめ、これらを混同していました。けれど、やがて子ども達の活動の中から、その違いに気づき、次のように整理してみました

た。

コーナーとは、

図-12 (A) のように、二方が壁、または家具で、子ども達は、その中で活動を展開する。

外部からの刺激を受けやすく、静かな活動には不向き

で、あそびを中断

させる要素が多く、あそびは、どうしても長続きし

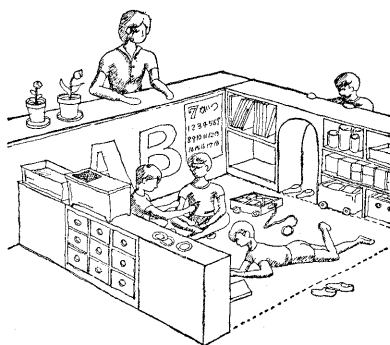
ない。

スペースとは、

図-12 (B) のように、三方を区切ったものや、二方を区切り、そこにカ



(A)



(B)

図-12 コーナーとスペースの違い

ーベットやゴザを敷いて、活動空間をはっきりさせたもの。その中で活動は、コーナーとは、あそびの継続時間の長さを取り上げてでも大分違う。特に、絵本を読む場所などは、スペースの方が、子ども達にとって、他からの干渉も少なく、また、「秘密の場所」という意識ができ、落ちついた活動を助長させる。

家具で子どもの視線は、さえぎられているが、保母は、子ども達の活動を十分に見守れる。それは、家具の高さが、九〇センチぐらいの場合、子どもと保母の目の高さが違うため、子どもからは活動空間の外は見上げる状態となり、保母は普通の視線方向となる。また、三〇センチぐらいの家具やカーペットを敷くだけの場合でも、子ども達は、場所・範囲を意識し、そして無意識のうちに、不透明なカーテンを作ってしまったように観察された。そして、活動の内容によって、オープンな活動空間、まったく個室的なイメージを与える活動空間など、それぞれ変化のある方がよい。それは、その目の状態に合わせて、あそびや活動空間を選べ、集団の中でも、子ども達の個性を尊重できることなど、子ども達の活動から教えられました。

このように、私達は、従来のような無性格なコーナーより、性格付けのされたスペースへと、今では、はっきりした目標をもって、子ども達の活動の場を設けて行くようになってきました。

子ども達は今……

保母以上に、早く違いをとらえたのは、やはり、子ども達で、生活も、はっきりと変わってきました。

前々号で、一部述べましたが、自由あそびの時に、ベランダや廊下づたいに、保育室をぐるぐるとかけ廻る追いかっこが、多く見られました。静かに活動している他の子ども達のことなどおこまいなく、時には、そのあそびまで、破壊してしまう始末。今では、あそびの発展した場合、特定の子どものみを除き、ほとんど見られません。

特定の子どもとは、四歳児のみの君、公一君らで、比較的コソコソとあそぶことが多く、仲間と一緒にあそんでいても、突然、無意味ないたずらをして、仲間と嫌がられ、村八分にされてしまうのです。あそびの持続時間も短かく、すぐ飽きてしまう。落ちついて物事を考えることのない家庭環境で育っていると言ってしまうそれまでで、結局、あそび方・あそびを知らず、仲間と共に活動するルールを知らないと言える。

保母としては、もっとダイナミックなあそびができるよう、空間を活用してあそび・あそび方を知るよう、そして、落ちついて物

事を考えることを指導している。今では、こういった子どもも、かなり減っている。

また、子ども達自身が、心理的に場を認識してきたことは、私達としては、驚きです。

積木やブロック等、手近な所にある玩具等も、カーペットを敷くことにより、大きく発展したあそびとなってくる。カーペットは、掃除の都合で、朝子どもが登園する直前に敷くことが多いが、うっかり保育が敷き忘れたりしていると、(オープンな活動空間と重複して利用している場合など)そこは、レスリングや怪獣ごっこなど動的なあそびの場となる。しかし、ひとたび、カーペットが敷かれると、その上は、自然に、ブロックやママゴト等、静的なあそびに移ってゆく。

また、保育の指導がゆき届いているクラスや年上のクラスでは、自分達でカーペットを敷いてあそぶ。

これらは、スペース保育三年間の成果であり、保育による保育の重要性と共に、活動空間を設けることが必要ことが顕著に現われたとみて良いのではないだろうか。

今後の課題と問題点

しかしながら、すべてにおいて、スペース保育が従来の保育を改良した、新しい保育方法の一つとは、言い切れません。

根本的な問題としては、絶対面積の不足は改良されていません。そして、園舎の計画・設計段階で区の管轄等設計者に対して、現場の意見が、十分反映されるような建設システムなどは、働きかけていますが、改良されていません。

従来のワン・ルーム形式での保育、およびその空間の多くの問題点は解決されましたが、ある方から、「(いつも同じような活動の場を設けていては)あそびが固定化しないか?」との疑問を投げかけられました。

私達は、バタバタと落ちつきのない子ども達に対して、あそびの深まりや持続性にとらわれ、指摘された点を見落としていたことに気づかされました。

ともあれ、最初の目的であった子ども達の思考の深まりや、集中してあそぶことについては、ある程度、達成したことを思っているが、今、「空間を活用したあそびそのものの指導・誘導」をもう一度考えなおさねばなりません。

二丁

共同 板橋区立赤塚保育園 平沢公代・高橋雪子他
神谷・荘司計画設計事務所 坂本啓治

(板橋区立弥生保育園)

保育の体験と思索

—子どもの世界の探究—(十八)

津 守 真

四歳児の冬——三学期の遊び

穴を掘る

一月十七日

四歳児の秋には、子どもは友だち同士で遊ぶことの面白さを味わいはじめたことを、いろいろの機会に保育の中で、私自身、体験してきた。三学期も、秋から継続して、友だちと楽しんで遊んでいるが、寒い季節であることも加わったせいであろうか、じつくりと遊びを楽しんでいることが多いように思われる。そんなに華やかな遊びではないけれども、ひとつひとつに目をとめてみると、子ども自身は、何か実質的な体験をしている。

寒い日で、庭に出ている子どもは少なかった。

隣の組の子どもたちが二人砂場に出ていた。砂を長いシャベルで掘っている。一人が「地下を掘る」と言っている。私も傍で砂を掘りはじめた。私が掘っていると、もう一人の子が、「手伝ってるの?」とたずねるが、私も「ちがうよ、地下を掘ってるんだ」と答える。地下を掘った砂の堆積が、だんだん大きく高くなる。

SとShが室内から出てきた。私の隣で、シャベルで砂山をつくりはじめ、私に「手伝え」と言う。前から地下を掘っている子たちの砂山をたえず気にして、横目で見ており、「もっと高くなつたぞ」と比べたりする。地下を掘っていた子たちは、砂山を高くすることにばかりは関心がないらしい。砂山に、木の枝などをつきさし始める。一時間くらい砂場にいたが、とても寒い。砂場には、これ以上子どもも集まらない。

寒い日で、午前中、四人の男児が砂場に出ていただけで、他の子たちは室内にいたのであるから、子どもでも寒くて、戸外では遊びにくかつたのだろう。それにもかかわらず、朝から砂場に出ていた子どもたちは、よほど砂場をすることに執着をもっていたと考えてよいと思う。この子どもたちの執念は何なのだろうか。

シャベルで砂を掘っている二人の子どものうち一人は、「地下を掘る」と言う言葉を発してくれたので、この子どもは地下を掘ろうとしていることが私にわかる。現代の子どもにとっては、地下鉄、地下室、地下道などは、日常、親しみのある語であって、いずれも階段をおりていくところであり、昼間でも電灯がついていて空が見えないところである。また、地下鉄も地下道も、どこか未知の世界へ通じる道路でもある。地下という語は、「穴」と

いう昔からの日本語と共通の感覚をもっていると考えるとよいだろう。子どもは、シャベルで砂をすくい出して傍にその砂をつみ重ねる。穴を掘るには、同じ場所にくり返してシャベルを運ばねばならない。そして、目を同じ場所に注ぎ、力をこめ、心身ともにエネルギーを使わなければならない。子どもはこうして穴を掘り進める。おとなの目から見れば浅い穴であっても、子どもには、自分の力の出せる限りに掘れる穴は、地下の深い穴である。

私自身も、少年時代から、穴を掘る作業はいろいろとやってきた。開墾するときには荒地に穴を掘ってゆく。木の根を掘り起すときに掘る穴。壕を掘るとき穴。井戸を掘るとき穴など。力をこめて、シャベルで固い土を切つてゆくのは重労働である。固い石地にぶつかったときには、半日かかって作業が進まないで、放擲したくなる。穴を掘る作業は、同じ場所を、またその周囲を、力をこめて、一足ずつ、掘り下げてゆく作業である。こうして地面に挑戦しているうちに、いつの間にか、そこに穴ができている。あるところまでゆくと、比較的やわらかい土に達して、作業のはかどるところもある。そしてまた、大きな石にぶつかって、それをとりのけるのに一苦労する。海に近いところだと、掘っているうちに、下から水が湧いてくるときもある。それは壕には適しないけれども、何か新鮮な喜びがあり、そこでひと仕事終

えたような気分になる。

精神作業にも、地面に穴を掘るのと似たようなことがあるように思う。同じところを、何度も反復して叩いているうちに、だんだんにそこが深くえぐられてゆく。

こういうことを考えると、砂場で穴を掘る作業は、あまりに抵抗がなさすぎるような気がする。幼児の力には、砂場がちょうど良い固さなのかもしれないが、時には固い地面に挑戦することが、子どもに本当の作業の喜びを与えるのではないか。砂場の外で穴を掘るといのは、多くの幼稚園でタブーであるかもしれない。しかし、これからの子どもにとって、それができたならば、どんなにかよいことだろうと思う。

砂を掘るとき、そこに穴ができ、地下ができる。労働の報酬としてそこに生れるものは、休息と安らぎの場としての穴である。昔から、洞窟は、精神の安らぎの場所と考えられ、また、他界への通路として考えられてきた。^{注1}子どもが地下を掘ると言うとき、その砂穴の内部に、子どもは自分自身がいりこみ、その穴の奥の未知の世界へ、そこから通り抜けてゆくことを夢みているかもしれない。そういう夢がなかったら、この寒空の下で、どうして長時間、穴掘りをつづけるだろうか。砂場で穴を掘り、傍に砂の堆積が高くなってゆくと、その瞬間には、その空間が子どもの

全宇宙になっているのだと思う。その世界には、天上もあり、地下もある。砂場の外に立って見るときには、小さな砂穴であるけれども、砂場が全世界であるときには、それは他界に通じる地下の穴になりうるし、^{注2}自分がはいりこんでうずくまる大きな穴にもなりうる。

穴を掘るときに、すくい出した砂は、傍に山をなして高くなる。他人の目から、すぐに目立つのは、穴よりもむしろ傍の高い山であろう。深さと高さとは、こうして対をなすことなのである。穴を掘っている子どもの作業の途中から、室内から出てきた S Sh とは、まずその山の高さに目を奪われる。そして、この子どもたちは、山を作りはじめ、たえず前の子たちの山の高さを気にして、これと比べながら、もっと高い山を作ろうとする。しかし、前からの子どもたちは、山を高くすることには関心を示さない。穴掘りの代償としてできた砂の堆積に、木の枝などを何本もつきさしている。これは、穴を掘った作業に対する記念として、飾りつけをしているかのようである。

この朝、穴を掘っていた子どもたちは、隣の組の四歳児で、私にとっては、馴染みのうすい子どもたちである。この子どもたちが、寒空の下で、熱心に砂を掘っている姿にひきつけられて、半日を共に過した。この子どもたちの生活をもっと知っていたら、

この特定の子どもたちが、この作業をしないではいられなかった、この子どもたちの負っている精神的課題にもう少しふれることができたかもしれない。しかし、この日だけのゆきずりの観察者にも、この子たちにとって何かたいせつなことが行なわれているのだろうということを理解できるし、その内容についておぼろげながらも推察することができる。

このことから、私は、庭に大きな穴をいくつも掘っていた知恵おくれの子どものことを思い出す。その頃、私は地面に穴を掘ることの意味を、全く理解することができなかった。母親から、庭中穴だらけにすることを訴えられたとき、私は何と言ってよいかわからず、多分、要領の得ないことしか言えなかったのだろうと思う。いま、その子どものことを考えるときに、毎日、庭に穴を掘らないではいられなかったその子どもの負っていた課題、その子ととりくんで解決できなかった課題があったに違いないと思う。安らぎを得る場所を探し求めていたのかもしれないし、何か別の世界への通路を探してエネルギーを使っていたのかもしれない。どんな行動にも意味があることを前提として、そのことを考えていたなら、もっと子ども自身の助けになったらうと思うし、親に対しても、一緒になってこの子のことを考える足場ができたろうと思う。

注1 本田和子『保育における経験や活動』（第一法規）には穴を掘ることの考察がよくまとめられている。

注2 穴という漢字は、屋根の下に、八印（入口の形）のあいた姿を示す会意文字である。（藤堂明保『漢字語源辞典』）すなわち、他界への入口を示す。

穴をつなげる

同じ日の午後、庭の砂場で、男児IとKとTとは、砂山をつくり、山の頂上から下に向って穴を掘り、それから、山の横から横穴を掘る。Iは、「ここを掘っていくと、上からの穴につながるんだ」と言っている。しかし、横穴は下方に掘りがちで、水平に進まない。ついに成功しないままに終る。

穴を掘るのでも、この場合は、午前中とは違う。砂山の頂上から掘る穴は、容易に掘り下げられる。砂山をこわさないように、注意深く掘る。そして、横穴を掘ってゆくと、頂上からの穴にぶつかるといふ空間関係が把握されている。けれども、横穴を水平に掘るのはむづかしく、どうしても下向きになってしまう。掘る作業は下方に向うのが自然であるらしい。水平に掘るのには、特別に意志をはたらかせて、注意深くせねばならない。この

ときには、遂に穴を貫通させることに成功しなかった。この後、何度も、私はIとKとTとが、砂山に穴を掘って貫通させようとしているところに出会った。この三人の男の子は、どちらかというところ、他の子たちからははずれて、三人で遊んでいることが多いようである。砂山に、上や横から穴を掘っていった、貫通させる作業は、三人の間の気持を通じさせようとしているかのように思われる。砂山にトンネルを両側から掘っていった、これが貫通して双方の指先がふれ合うとき、何か相手と通じることができたように感じるであろう。努力の後に、指と指とがふれ合う体験は、言語で理解する以上に、人間相互のつながりを感じさせるものである。何人かの子どもたちが、山にトンネルを貫通させる遊びに熱中しているときには、トンネル遊びにとどまらず、その底には、互いに通じ合う関係を作りあげる作業に従事していると考えよう。

一月三十一日

朝、私は部屋の前の階段に腰をおろしていると、いろいろの子どもが、一寸私の膝に腰をおろして、しばらくして遊びにゆく。女兒は、野球をしている年長の子どもたちのわきで、野球を見

ながら、その子たちと何かしゃべったり、動きまわったりしている。mは、自分ひとりの世界の中にいるようなことが多かったから、年長の男児たちの遊ぶのを見ているとは、ずい分かかったものだと思う。

まもなくmは、なわをもってきて、なわとびをしようと云い、私と二人とびをしたらしく、私もいろいろと試みるがうまくいかない。それから、自分がなわの一端を持ち、私に他の端をもたせて、なわをふる。それを見て、女の子たちが、次々に「いれて」と言ってくると、mは「こっちにいきましょ」と言って、私の手をひいて場所をかえる。いれてと言って並んでいた女の子たちは、何となく立ち去って、だれもいなくなってしまう。なわとびの遊びがもつとまとまるように、私が積極的に何か言った方がよかったように思う人もあるかもしれないが、私はむしろこれよかったのだと思う。mは、三歳のときから、おとなと二人だとうまくいくが、複数の子どもとおとなと一緒にいることがむづかしい。それが子どもと一緒にいられることが少しずつ多くなり、またおとなと二人だけで遊び、その両極を揺れ動きながら、友だちの中に入れるようになっていく。この朝のような中間の状態があっても、少しもふしぎはない。移行行きの時期には、前の時期の行動と後の時期の行動とが混じり合ってあらわれるようである。

どちらかに割り切ってしまうことはできないので、両方があらわれてあたりまえと考えた方がよい。

いれてといつて集まってきた子どもたちも、そのあそびがうまくつかないとみると、だれも文句も言わずに、自然に立ち去るのもふしぎである。子どもたちの間で、お互いの状態をよく心得ていて、自分たちの間で自己調節しているように思われる。

けむり

まもなく、I、K、Tが、通りがかりに、土だんごを私に見せ、一緒に山にいつてくれという。私は一緒に山に走ってゆく。山の上の土は、埃のような土である。I、K、Tは土だんごに埃土をまぶして、つやが出たと言つて私に見せる。土のだんごは、本当に光っているところがある。そのうちに、その埃土を投げ、けむりだと言つて大声を出し、みんなで埃土を投げはじめた。一時はあたり一面、土ぼりかもうもうと立ちこめた。私はこれは何かイメージを伴つたことのように思えて、とめる気にもならず、じっとしていた。しばらくして、子どもたちは走り去つて、あたりは誰もいなくなつた。ここでも、子どもたちは、私と遊ぶのではなく、子ども同士で何かを楽しんでいることがわか

る。そして子ども同士で一緒に遊びながらも、そこには子どもの内的イメージがある。

土埃を投げて「けむり」と言うのは、こまかい砂塵が空中に舞い、しばらく空中にとどまつて浮動する様が「けむり」に似て見えるからであらう。けむりは、火が燃えることに伴う現象であつて、ふだんは子どもが容易につくり出すことのできるものではない。子どもは埃土を力をこめて空中に投げる。力をこめて投げる動作は、そのはげしく放出するエネルギーにおいて、火に似ている。子ども自身の能動性においてつくられるのが、土埃のけむりであるとも考えられる。子どもは、土埃を空中に投げることによつて、現実には子どもが関与することを許されない火をつくり出し、空に立ち昇る煙を生み出している。それは偶然の機会にはじめられ、一時はどうなることかと思つても、ひとしきりの後には終つてしまう束の間の遊びである。一瞬のことであるけれども、こういうところに、子どもの遊びの本質があるのだと思う。

高い所と低い所

走り去つてゆく男の子たちの後を追つてゆくと、すべり台の上で女兒に呼びとめられる。トンネルになった傾斜面に、ごさがし

き並べられている。私はmに言われて、傾斜面の上の方に坐る。日かげでとても寒い。うば車に人形がねかしてあるが、おうちこっこをしているというのでもなさそうである。mは傾斜面の下から、水の入ったバケツを持って上ってこようとする。「できない」と言いながら、ようやくバケツを持ち上げてくる。そんなことを何度もくり返している。

傍のすべり台では、男児I、K、Tが頂上に乗ってはさかさすべりなどしている。私にも上ってくるように言うので滑り台の頂上に上って立つと、とても高いところに入った気がする。子どもたちも、とても高いところに上ったことを楽しんでいるようである。三人で一緒になって走りまわって遊んでいるのであるけれども、その遊びにはごっこ遊びのような脈絡があるのではなく、そのひとこま、ひとこままで、物質のイメージや空間のイメージを楽しんでいるのである。

mが私を呼ぶ。トンネルの傾斜面の下で、私に横になるようにいう。私はねころがると、青空がみえる。そこに男の子が上からのぞきこむ。自分が高いところに上った感じとは違う。地面に横たわって、遙かに高い天の青空を仰ぎ見る。自分が低いところに横たわっているが、天の高さを一層際立たって感じさせる。

子どももこうして、高いところの上で立ったり、低い地面に

横たわって高い空を望み見たり、こういうことをくりかえして、自分自身の内的世界に、天と地の認識も明瞭にしつつあるのであると思う。それは単に、空間関係の知的認識にとどまらない。それも含みながら、自分の生きる精神世界の天と地とその間にひろがる世界を感得し、更に拡大して言うならば、仰ぎ見る天の高さと、地につく人間の低さを学んでいるとも言えるのではないかと思う。

四歳児の冬学期の、身のひきしまるような寒い戸外での遊びにつき合って、この子どもたちが、敢て寒い戸外で遊ぶだけのことがあると思った。

(つづく)



吉原幸子さんという詩人の、「喪失ではなく」という詩の中に、次のような一節がある。

大きくなって

小さかったことのいみを知ったとき

わたしは「えうねん」を

ふたたび もった

こんどこそ ほんとうに

はじめて もった

幼児期とは、自分が幼くあることの幸せも、贅沢さも知らず、それを大切に思うこともない、そんな存在のありようを指す言葉であるようだ。詩人は、その「まばゆさ」に気付いたとき、はじめて「幼年を生きる」ことが出来ると歌うのである。

子どもであった日の様々な出来事は、束の間の雪のように消えていくかに見えて、見つめ直す視線にその輝きがとらえられ、その重さが体の一隅に感じられた

とき、再び、確かなものとして、私どもの日々を支配し始めると言うのだろうか。

夏の宵闇に、可憐な火花の曲芸を見せる線香花火の思い出は、その炎に、言葉も無く全身を吸われていた幼い日々をよみがえらせてくれる。そして、不思議なことに、私どもは、その日々が、あの人にも、この人にも共通であったことを疑わない。彼らの見入ったのが、赤い紙こよりであれ、或いは蘭草の花火であったとしても、そんなことはどちらでもよいのである。

それぞれの指に咲いた一度きりの「私の花火」それをまばたきも忘れて見つめた瞳の輝きは、否、そんな瞳の持ち主であった「私」は、すべての人々に共通なのだから。幼児体験が、普遍的であり、共有可能であるとは、まさに、このような意味においてなのである。（本田和子）

幼児の教育 第七十七巻第八号

八月号 © 定価二二〇円

昭和五十三年七月二十五日 印刷
昭和五十三年八月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

118 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

想像から創造へ—乳幼児の話題の童具

和久洋三の白木の玩具

特別頒価 40,000円 (定価 41,200円)

お支払いは、5回分割払い 月々8,000円

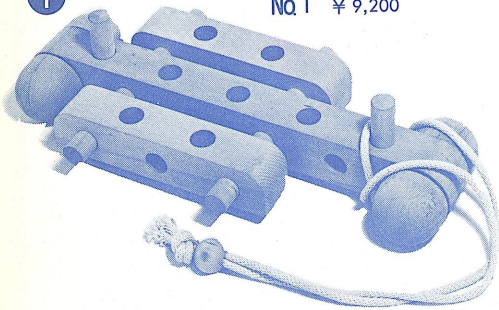
☆ご注文の品は、3回に分けてお届け致します。

幼児用
セット

第1回	No.1	No.2			
第2回	No.3	No.4	No.5	No.6	
第3回	No.7				

1

No.1 ￥9,200



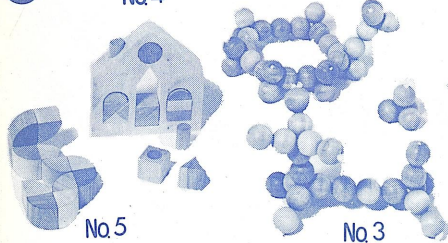
No.2 ￥6,500



2

No.4

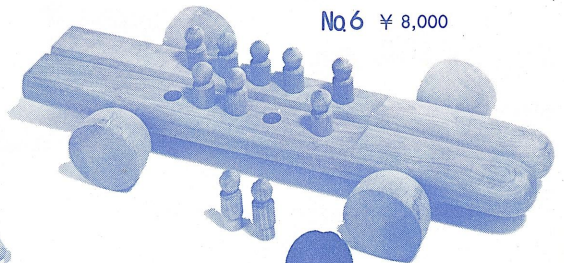
No.6 ￥8,000



No.5

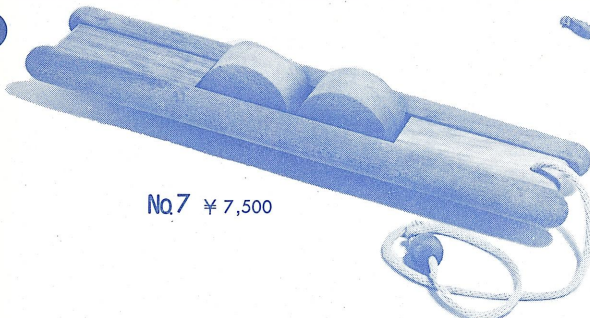
No.3

3点1セット ￥10,000



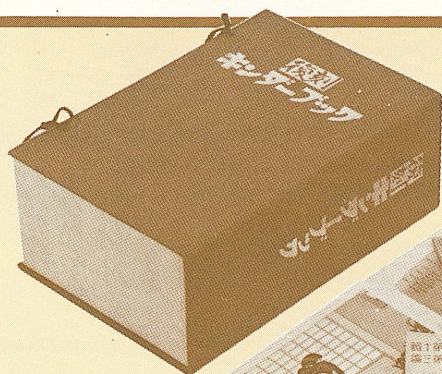
3

No.7 ￥7,500



フレーベル館

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課 TEL (03) 292-7781 (代) にお問い合わせください。



ただ今、予約受付中!!
締切・昭和53年8月末日
刊行予定・昭和53年9月上旬



創刊50年記念出版

復刻

今、甦える保育絵本の原点。

半世紀にわたる保育絵本の歴史の精髓を、時を超え感動も新たに再現

キンダーブック

フレーベル館創業70年を記念する事業として

わが国における絵本の歴史のなかでも、とりわけ保育絵本の歴史は重厚です。

昭和2年、はじめて「キンダーブック」がこの世に生まれてからすでに50年を数えるに至っています。この永い歴史の中から、価値ある戦前の保育絵本を復刻しました。

○50年にわたる出版の歴史の中で、戦前の証人たる40冊を厳選。

○紙質、活字、絵画、造本など、すべてを細心の配慮で復元。

○風物・歴史の資料としてだけでなく、生活や思想の流れまでも知らせる貴重な記録。

○思い出の愛蔵文庫として、教育者・絵本愛好者の資料としての生きた記録です。

○全4巻（各巻10冊・計40冊）

第一巻・昭和3年～5年の中から10冊

第二巻・昭和6年～8年の中から10冊

第三巻・昭和9年～12年の中から10冊

第四巻・昭和13年～16年の中から10冊

○特別記念

キンダーブック創刊号（昭和2年発行）

ツバメノオウチ創刊号（昭和7年発行）

定 価 48,000 円

予約特価 45,000 円

○お申し込みまたはお問い合わせ先

フレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または
本社営業課（03）292-7781代にお申し込みください。

フレーベル館